

# 貞丈雜記

五之下

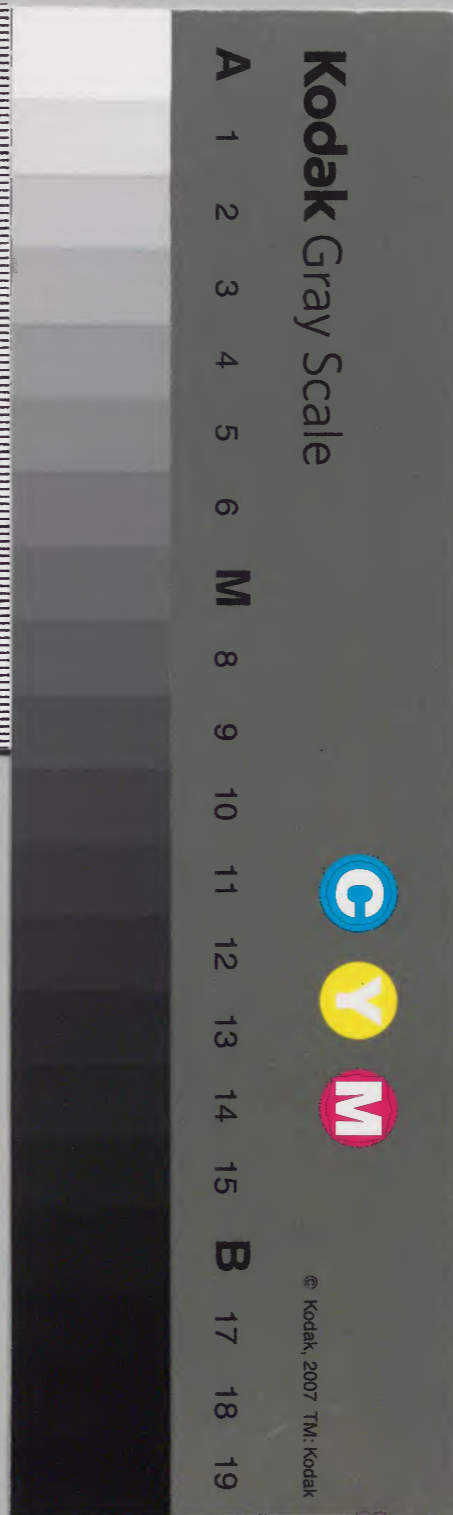
| 太政官文庫 |   |   |   |
|-------|---|---|---|
| 和     | 一 | 一 | 三 |
| 書     | 一 | 三 | 七 |
| 門     | 五 | 五 | 號 |
|       | 函 | 一 | 架 |
|       | 冊 | 三 | 冊 |

| 内閣文庫 |   |   |   |
|------|---|---|---|
| 和    | 一 | 一 | 三 |
| 書    | 一 | 三 | 七 |
| 類    | 五 | 五 | 號 |
|      | 冊 | 二 | 函 |
|      | 架 | 二 | 冊 |

(10-1)

| 内閣文庫 |           |
|------|-----------|
| 番號   | 和 11375   |
| 冊數   | 32 ( 10 ) |
| 函號   | 212 16    |

内閣文庫



裏面記載のない箇所は省略  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり  
原本の文字など不明瞭な箇所があり

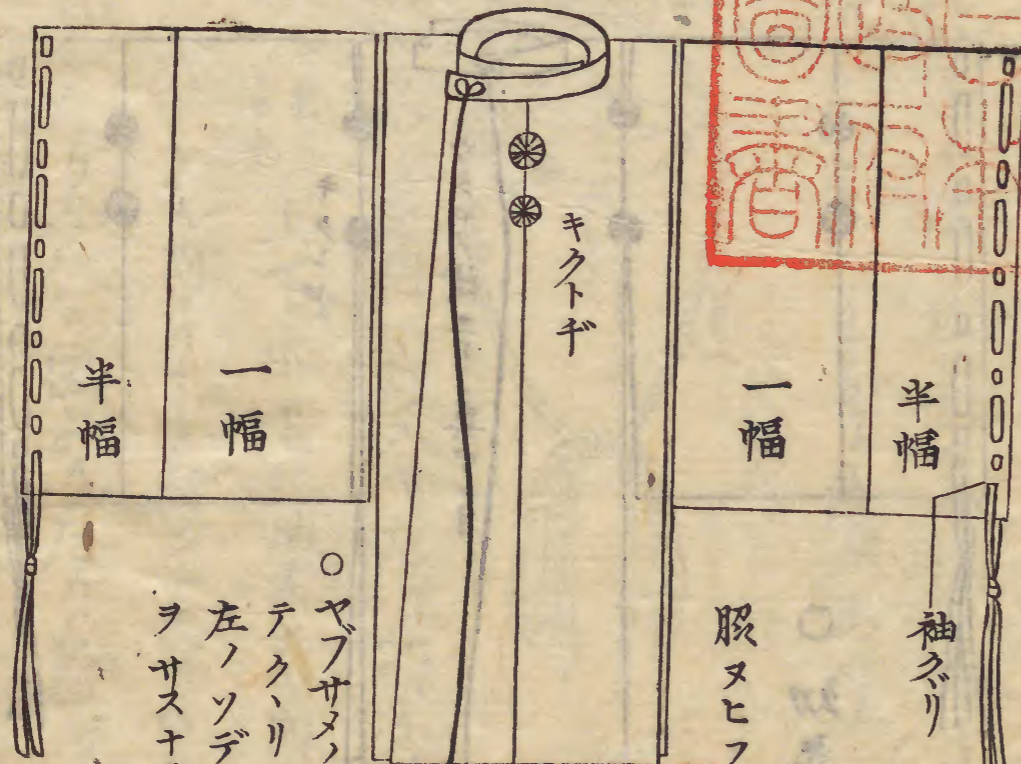
文庫部省

水千前

水千前

水千前

雑記五



○ヤフサメノ時ハ袖ロラ右ノ手クハニ  
 テク、リヨセテ緒ニテユヒラク也  
 左ノソデハカタヌグ也其上ニコラ  
 ヲサスナリ

服ヌヒフサガズ

袖スリ

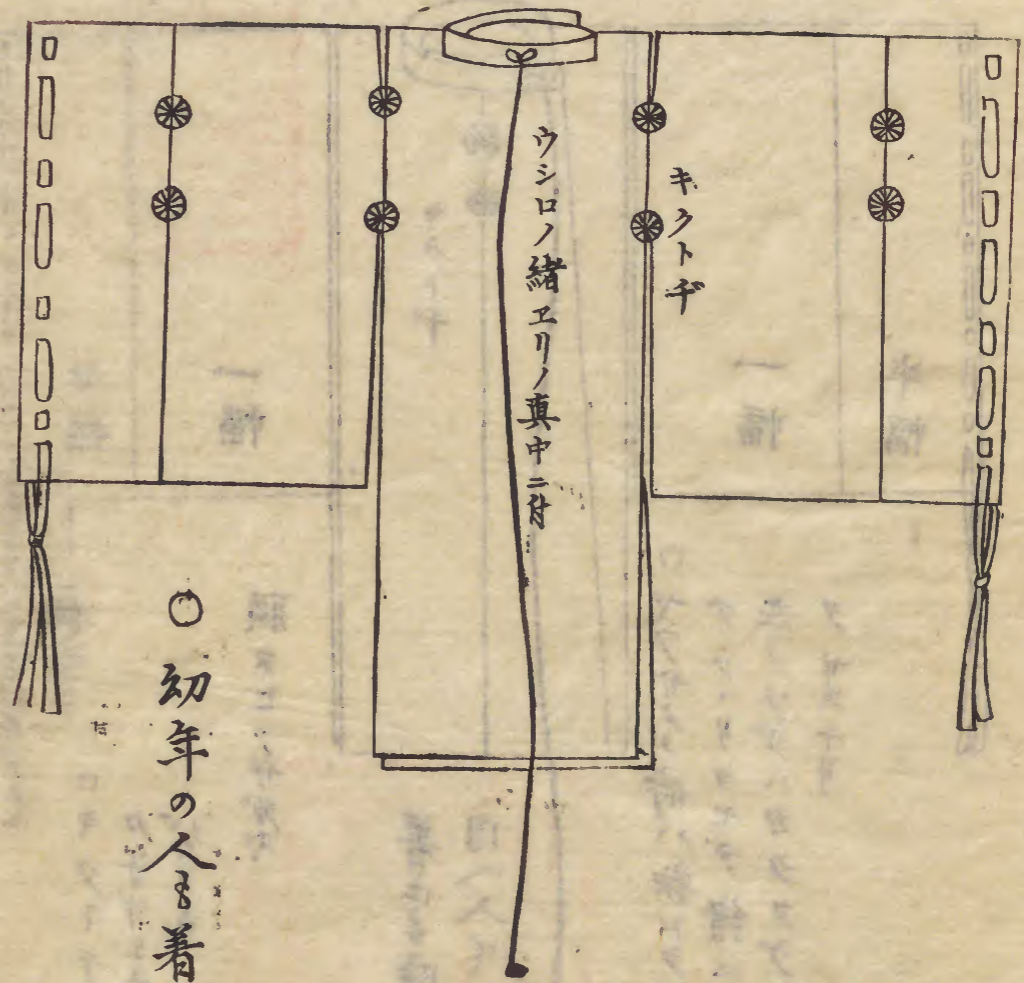
着る時、襟の  
 内へ入る、其の  
 也

○キクトギノ大サハ極リ  
 カ子ガシニテ一寸五六分  
 バカリ也

三

水千前

○水干後

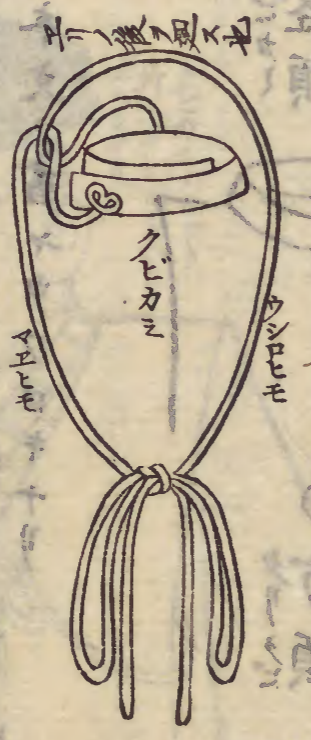


○幼年の人も着る物也

一水干のひもの結拵前の結と後の結と異なるものあり

緒ハ前引き後引きの後の結ハ裏の結を理して左の肩の上より

お引きして後ろに結がある



一又らびかこのかどを内折入たりらびかきも異なるものあり

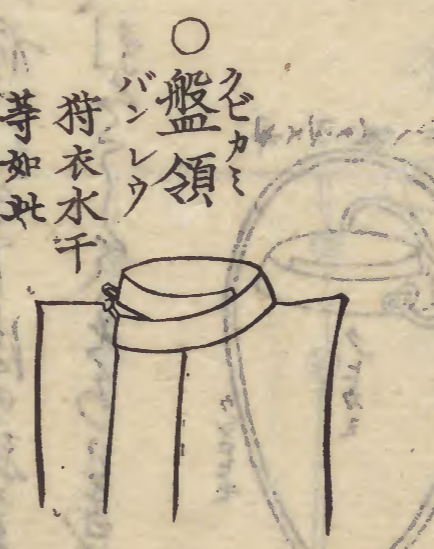
永綱抄為念家の書也 上下水干ハ幽玄ユウゲンナル間也上ハ前後の短

き相也らびかきを内折入りたるものあり

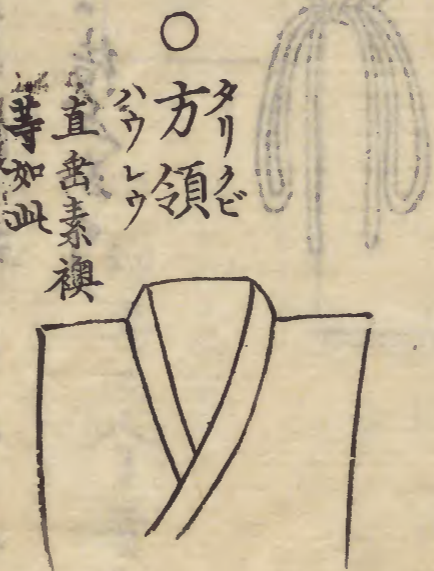
らびと云也たりらびハ紐ありたりらびあるハ衣の紐を肩より

後ハ付レたの紐ハびくこの折伏するさまに付テ左の袂より  
 糸出テ糸をさぢてゆべし馬も糸出テ糸の紐をさ後  
 より糸は同糸ゆべし真丈云タリクビは紐下リト云ハタ  
 タリクビナラバ云ハ文ニテハタリクビノ時ヒモノ付ヤウ替ルマ  
 ニ聞ユレハ本文ノ心ハクビカミノヒモヲ其終付直サシテタリ  
 クビニシテキルトキノヒモノ結ヤウノ違テ 尤ハ繪圖を著セ

光大曰盤領トハ盤  
 ノ字メグルトヨム領マ  
 ロクメグルフ云クセカコ  
 ミノ略語クセカミナリ  
 方領トハユリツケマ  
 ロカラス方ナルニ也  
 領メカラスメ着タ  
 レルニハクセクビヲ轉  
 語ニテタリクセト云  
 ナルベシ領トハユリク  
 変也



○盤領  
 袴衣水干  
 等如此



○方領  
 直垂素襖  
 等如此

○水干たりらびは着るる圖

左右ともよかこのごとくくびのこのかき  
 内へ折入て着る事もあり



雑記五

世二

古画にぬ此右の肩の上より  
 危の已き一紐のまぢりいありたるハ水干と心將

此ヒモハクビカミノ  
 ウシロニ付タルヒモ  
 ナリ

此ヒモハ領カミ  
 ノカドニ付タル  
 ナリ此所エ出ス  
 ナリ左ノタモト  
 ヨリ出ストハ此  
 変ナリ

明徳記ニ云はる事  
一 ちちやうけんのは  
ひくれまのさくれ  
保元治承ニある義ハ  
長袴の垂垂ト云  
亦ち一の程を  
又兼於生年  
十之七袴の垂垂ト  
保太( )云はる事  
をさしと云はる事  
印( )ハ長袴ト  
以テ( )ハ長袴ト  
垂垂ト云ハ一則今  
の長袴ト云装束の  
事

室町記ニ云將軍家  
判始十直装束  
長袴ハ直垂トアリ  
長袴ノ装束平家  
物指ト見ユ  
長袴ノ袴衣古今  
著イ集一見ユ  
長袴ノ衣太平記ト  
又ユ毛目長袴ト  
云袴ト云作ユ  
ナリ  
東鑑ノ中ニ長袴ニ  
十疋長袴冊定ナド  
云夏所ニ見タリ  
袴ノ名ユ一明也

○後世長袴ト云袴格  
テナキニ仍テ妙生  
袴等ニテ作ル也  
曾我物語卷四箱

一 水干の袴も垂垂のごとく長袴也地も毛も上と同しあひ引の  
あひ引きと云ふの字を二ツで九疋は付足之別は給事不及  
ありは立垂垂の袴は替り可なり

一 長袴の事仕立振垂垂の如し替り六袖と云ふなり紐九疋

右短地ハ毛目ハ一疋ハ紗練ト云へども毛目定まるるありあり

毛も不定多くハ白を用る菊と云ハ水干の如し毛目定まるる俱シ

二ツ付ハ後ハ三疋ハ四疋付ハ一疋ト云ハ毛目定まるる俱シ

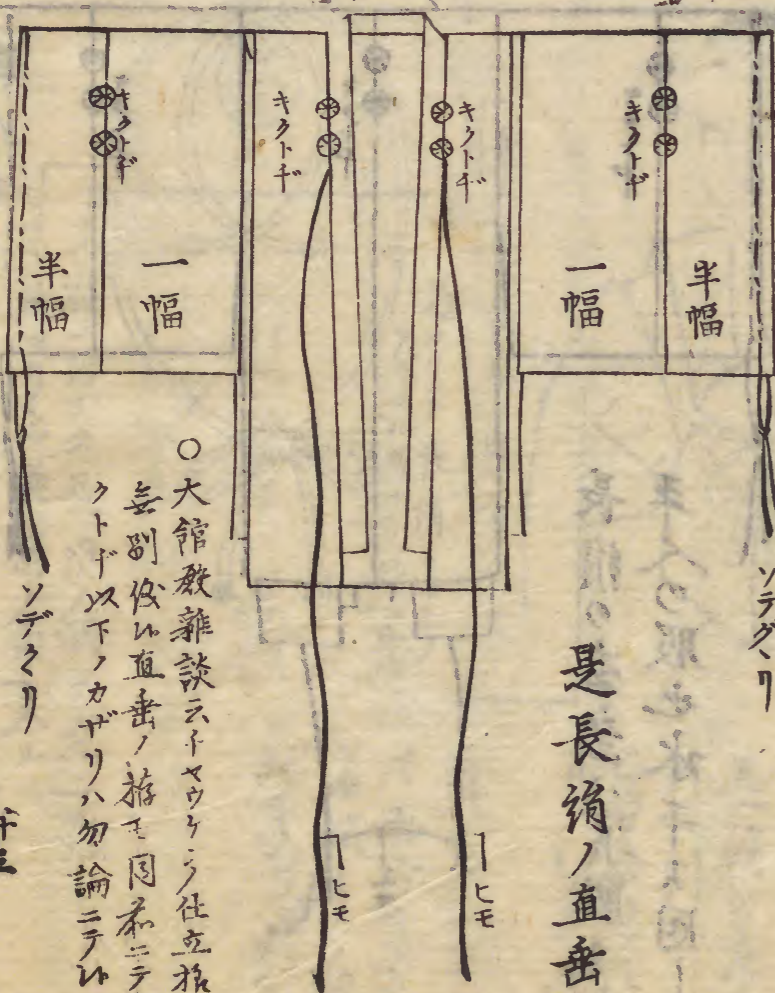
袴も垂垂の袴は替り可なりあひ引の如きと云ふの事ハ二

ツ疋ハ毛目付ハ茶の徳目九疋ニ寸袖下付ハ二ツ四ツ付ハ袴格の

扱も垂垂の袴の如し或は毛目ハ一疋ハ毛目付ハ袴格の扱も垂垂の袴の如し

袴格細袴也ける惠命院僧正宣守の代の人書れ海人漢  
芥と云ふはあり装束の長袴ハ右の長袴ト云ハ袴格の扱も垂垂の  
扱も垂垂と名づくといハ毛目付ハ袴格の扱も垂垂と云ハ

長縮前



雑記五

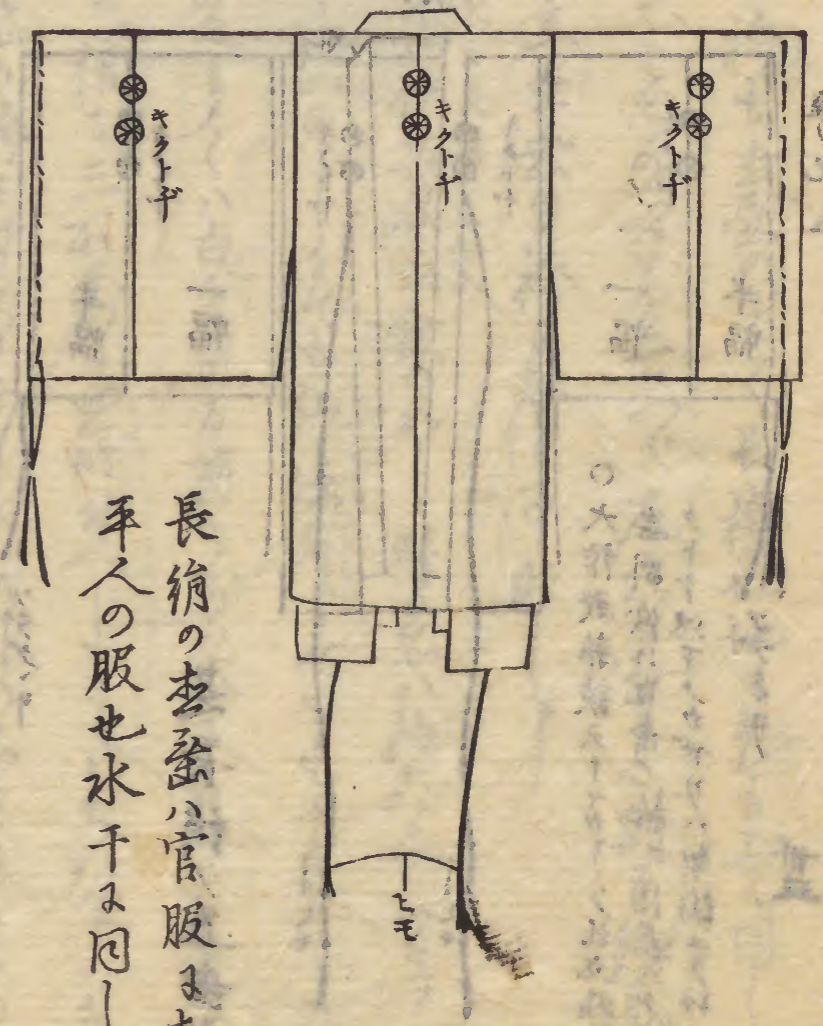
○大館教雑談云トマウケラ仕立振ノ事  
無別依ハ直垂ノ格ト云ハ同義ニテハキ  
クトナ以下ノカザリハ勿論ニテハ

卅三

玉指經三條三  
 中ノハのひく水  
 松ノ皮をぬぐ  
 水ノ皮をぬぐ  
 してこあひむ  
 五をふくこと  
 くれハニク

○西三條裝束  
 服以前用之菊ト  
 トテ黒キフサリ地ハ  
 スンニテモ紗ニテモ  
 八白シ

○長縮後



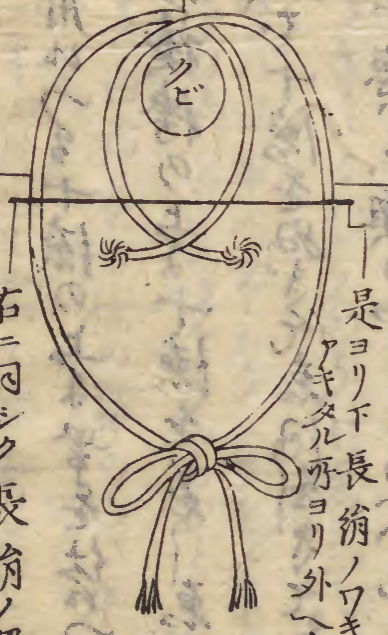
長縮の表蓋ハ官服ニあらず  
 平人の服也水干ニ同ノ類也

一長縮の袴ハ前ノ記ニどく表蓋の袴ニ同ノあひ引ノ  
 をニツクテ餘思ハ不及

○長縮紐結様



長縮ノ内  
 ニテ首ノ  
 後ヲマタ



雜記五

右ニ同シク長縮ノ服ヨリ外ハ先  
 是ヨリ上長縮ノ内ハ先

卅四

此ノもの結ヤウニ右ノ  
 ひもを長縮のめところ  
 の間へて右太の紐を  
 どりちがへて左の紐を  
 を引まへてあへたり  
 長縮の左太の服より  
 外へ引出て左太を  
 どり合せてまねてあ  
 へたり

京師誰家所蔵  
此裁り尋ね申後  
貞秀十徳ノ藏ナリ  
室永ノ火災ニカレ可  
惜布ヲ以テ造リ身長  
三尺後二幅ニ幅ナ  
一尺四寸襟廣二寸分  
大頸廣下八寸袖廣  
一尺五寸サタレ二尺寸  
襖積長一尺九寸廣  
上四寸下二尺其製縫  
腋ノ入欄ノ如シ帯平  
縮廣二寸長結頭ヨリ  
キレテ知レス云々

一十徳ジツトクのりききいひいしハ葛を葛布白くても黒くても

係ては用はつる十徳の上は帯を信する存公人かハ犬追物  
の時に着換袴の上は十徳をききいひいしハ葛を葛布を持せしめてあまひ  
入られしむ十徳をぬぎし意何れをききいひいしハ葛を葛布

貞衡云十徳ハ素襖のぬしハ葛を葛布もあかた衣の服あきく物ハ十徳を  
服をぬひかき物也昔ハ葛布ハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
ききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

下ハ四幅袴ハ葛を葛布をききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
也十徳ハ紋付ハ葛を葛布のりききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
醫者イシヤのききいひいしハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

一もあかた十徳ハハ禁制の内也と云々ハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
十徳ハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

あちハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布  
たりハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

一布衣記ハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

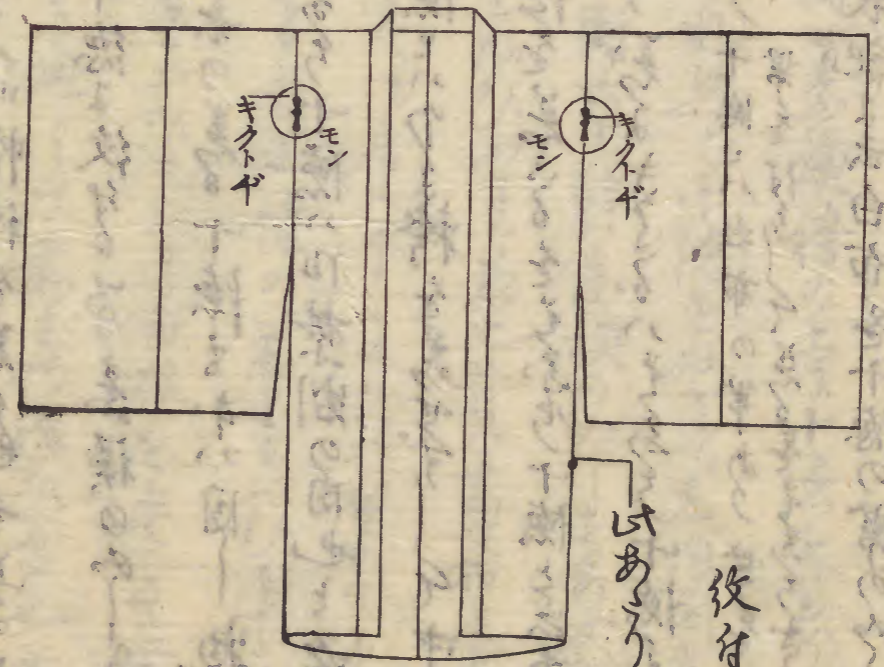
又云文安四年四月九日条十徳袴云々ハ葛を葛布もあかた侍ハ人袴よりききいひいしハ葛を葛布

雜記五

卅五

子興のきん夫モキの十徳又淺黄トモ千筋黒ト引るを  
侍エボシ着る袴ハ不美あり

○十徳前



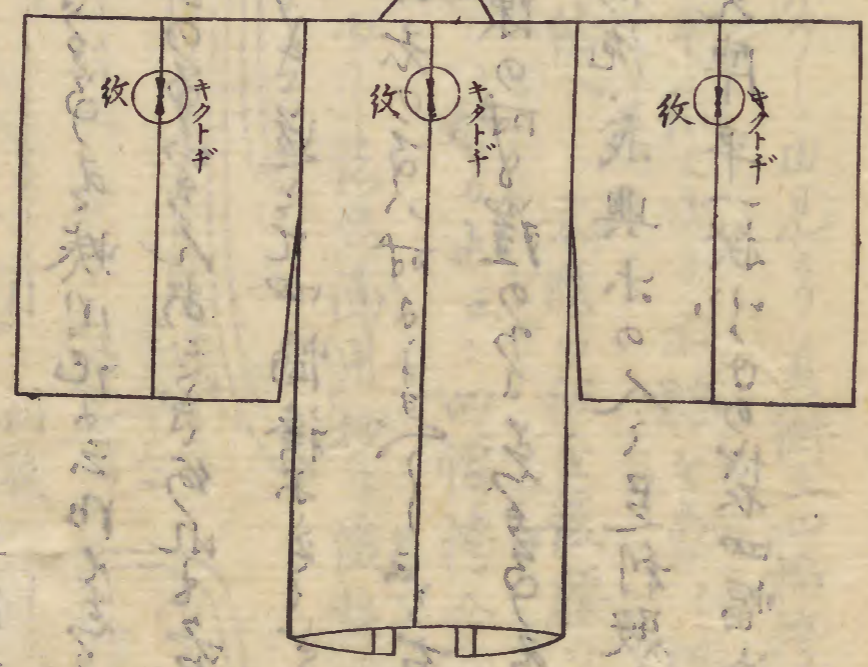
紋付けせざるあり

はあよりより下をぬひろく也

侍の着るハ胸ハ紐あり

はあハ袴の外ハ出しくも  
白き帯をきく也

○十徳後



私刀記云公方極ハ系宮  
由出立ハ革ハ十徳ハ小  
袴何も色ハあらず  
由紋柄を付付ハ仍ハ供  
元出立ハ同十徳ハ袴  
十徳のたけハ帯より長  
十徳の上ハ帯を以て腰あ  
を以て太刀を付き  
はを付るを掛せし  
引者のま

一四幅袴のり貞衡云四幅袴ハ若二幅後二幅あり四幅袴  
と云長ハ膝カミラ也

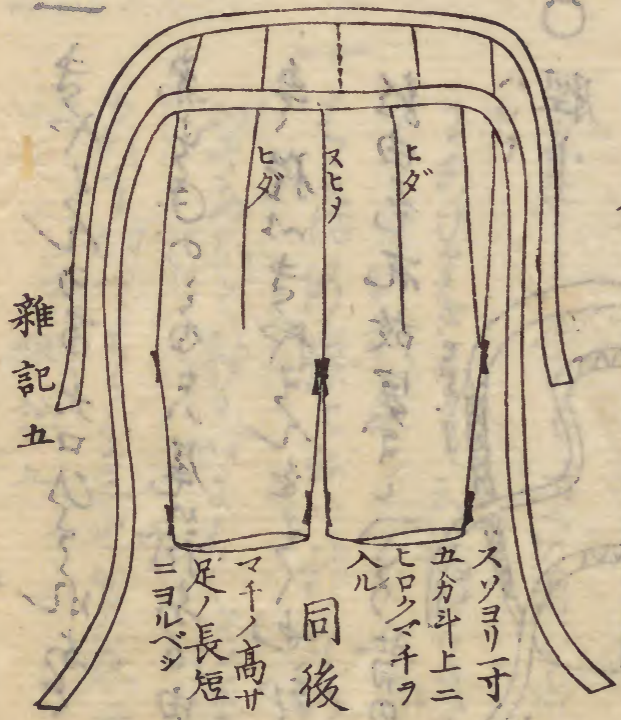
雜記五

卅六

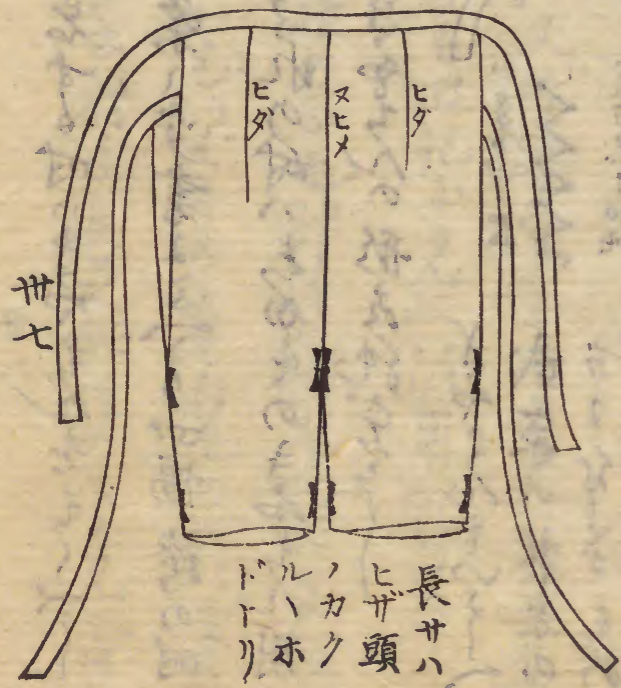


とぞ何う草ハ志やぶ草又思草也袴の色ハ不定濃イ材杯  
 少シ紋を付くも少シ後腰ハカク 脇板の 前腰ハカクハカクを  
 一ツあり紐を付く也云々 中間少志をうり思草ハカク  
 侍もきさるるを蜻川記ハ云ハカクをうり思草ハカク  
 少シ紋の多し何れも各志ハカク書札難ハカク  
 云々少シ道とて四幅袴ハカク云々  
 中野少志の多しハカク云々 右侍の思草ハカク  
 又軍陣の時ハカク云々 又平記武蔵野ハカク  
 左兵衛儀義興ホの人ハカク 足利殿ハカク 武蔵野ハカク 戦ハカク 時將  
 軍の先陣平一揆少志の袋衣四幅袴ハカク云々

四幅袴前



雑記五



廿七

皆赤のりく由見く真衝云四幅袴着ハ先後腰を當  
 て前を結て次ハ前腰をあて紐を後一廻一又前一廻を  
 前を結て一前腰の紐を後腰の外一けし廻て前袴  
 の長短ハ略也云々 四幅袴今ハ世ハ用ふる物ある有知  
 する人少シ 袴ハ通用抄ハ 假袴ハハ四幅袴のりく

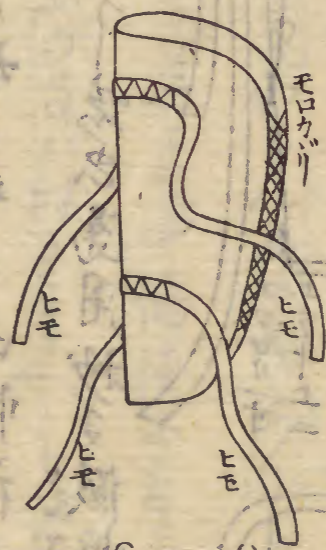
スソヨリ一寸  
 五分斗上ニ  
 ヒロクマナラ  
 入ル  
 同後  
 マナノ高サ  
 足ノ長短  
 ニヨルベシ

長サハ  
 ヒガ頭  
 ノカク  
 ルハホ  
 ドトリ

一 さまやまんのより大口ひしれあど 忌すの時いさまやまんをもちづ

赤らまのよめい尾籠ある由条く書きよころ四幅袴の時  
多程いさまやまんをもち也むしれの時いさまやまんのまやまん用  
新由元元故実よりころ昔のいさまやまんの形を純じむ

○脛中



いさまやまんもい  
武家の装束の  
方いすもの  
お祀り

一 京都將軍の法装束は衣文をば高倉藤中御言殿附てあせ  
られ中山殿年中行幸あり正月万々白き山を  
高倉殿より調進せられ由条く書きよころ  
内殿の時ハ高倉殿より

公方様の法供よりもち引さぐりてすあるは衣文の  
あり条くれより年中法大名は法成記は見えり

一行藤ハ古のい今の人袴着る如く常は着る中村方  
具足秘傳は見えあり条く書きよころ馬よの程あれは必ずしも  
新藤よやたさびやうしと靴のあたる所別の草を付る物と

い人ありやたさびやうしといふる日記見ええずそれと似るもの  
もあつたがのうけ用がし又行藤をききて貴人あ方の腰  
よあけききりて云説ありけるも日記見ええくび用がし

一 ちの海新藤と云ハ袴より袴のる也袴の付大追物笠懸や  
がふあふど袴の時よ新藤ハむらむきのまを白毛のかをもち  
うひは切てを云也笠懸ゆ出袴は具足秘傳の見えり

いさまやまんの  
と云もの袴  
は入用あきもの  
あり

虎弾と惟久の西  
 後三年の義家  
 於巨師末の神  
 長宿の虫歯は  
 少の行膝を  
 射り白星を  
 さげ一面を

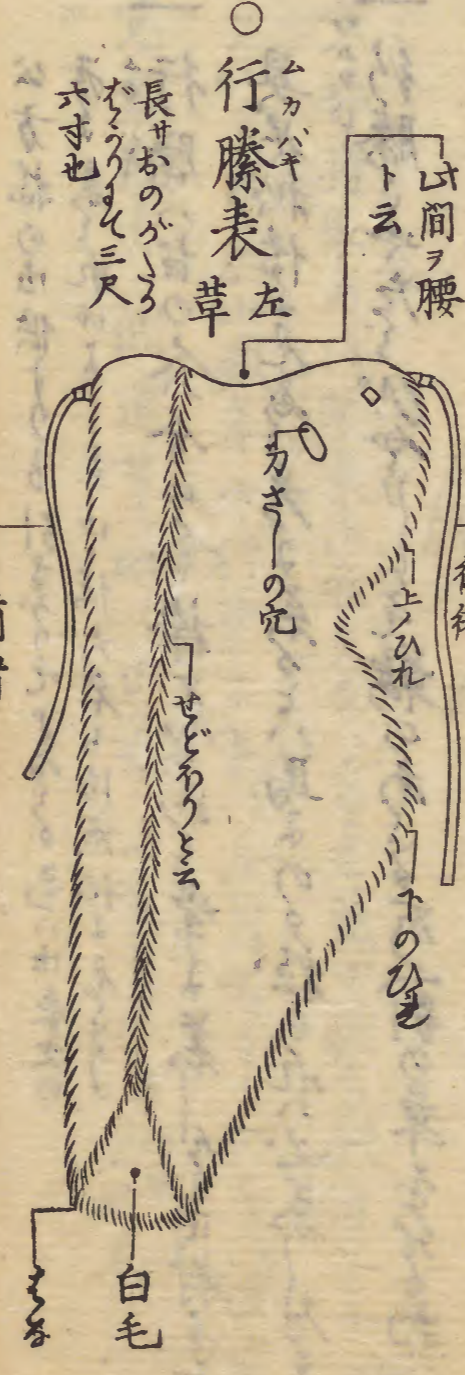
弾正の官ハ膝  
 のしやぎ  
 泥袴鞆霞  
 然皮を用  
 名ハ武官の

光大補入  
 犬追物図説曰  
 行膝ハ鹿の皮を  
 用るる武之若  
 年のハ毛色の  
 うすきを引ひ  
 年後毛色のこ  
 を用るる中略  
 ハ四月より  
 ろく毛ぬけ  
 五月は実色  
 夏白身あ  
 夏出芽て  
 秋ハ毛長

さし色らく  
 八月より又  
 ぬけたりて  
 毛の長さは  
 一尺二寸  
 一尺三寸  
 一尺四寸  
 一尺五寸  
 一尺六寸  
 一尺七寸  
 一尺八寸  
 一尺九寸  
 二尺  
 二尺一寸  
 二尺二寸  
 二尺三寸  
 二尺四寸  
 二尺五寸  
 二尺六寸  
 二尺七寸  
 二尺八寸  
 二尺九寸  
 三尺  
 三尺一寸  
 三尺二寸  
 三尺三寸  
 三尺四寸  
 三尺五寸  
 三尺六寸  
 三尺七寸  
 三尺八寸  
 三尺九寸  
 四尺  
 四尺一寸  
 四尺二寸  
 四尺三寸  
 四尺四寸  
 四尺五寸  
 四尺六寸  
 四尺七寸  
 四尺八寸  
 四尺九寸  
 五尺  
 五尺一寸  
 五尺二寸  
 五尺三寸  
 五尺四寸  
 五尺五寸  
 五尺六寸  
 五尺七寸  
 五尺八寸  
 五尺九寸  
 六尺  
 六尺一寸  
 六尺二寸  
 六尺三寸  
 六尺四寸  
 六尺五寸  
 六尺六寸  
 六尺七寸  
 六尺八寸  
 六尺九寸  
 七尺  
 七尺一寸  
 七尺二寸  
 七尺三寸  
 七尺四寸  
 七尺五寸  
 七尺六寸  
 七尺七寸  
 七尺八寸  
 七尺九寸  
 八尺  
 八尺一寸  
 八尺二寸  
 八尺三寸  
 八尺四寸  
 八尺五寸  
 八尺六寸  
 八尺七寸  
 八尺八寸  
 八尺九寸  
 九尺  
 九尺一寸  
 九尺二寸  
 九尺三寸  
 九尺四寸  
 九尺五寸  
 九尺六寸  
 九尺七寸  
 九尺八寸  
 九尺九寸  
 十尺

ぬり行膝と云ハ麻の毛皮をうるゝめてぬりぬり  
 白星ハ  
 残不  
 射子具足松  
 傳子委  
 然の皮の行膝ハ弾正の官の人あつてハ用ハ虎豹の皮ハ  
 公方孫又ハ三藏の礼あつてハ用あつぬ  
 射子具足松  
 傳子委

○犬追物図説を以て光大此圖を補入也

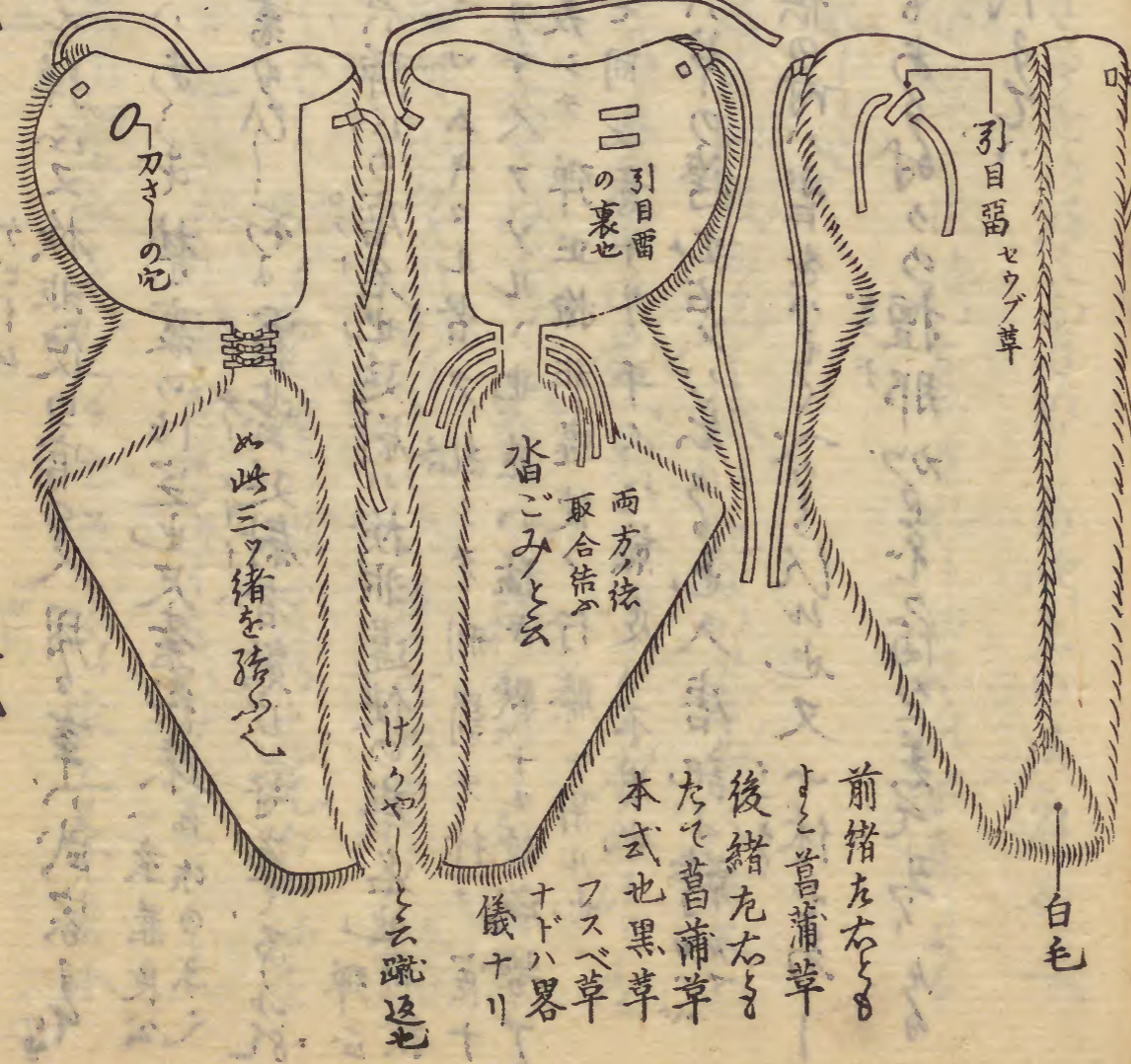


○行膝表  
 長サおのが  
 六寸也

○同  
 草右

○同裏  
 草右

○同  
 草左



雜記五

廿九

毛とツハハ即ち其毛の枯れけし百と申すは二不  
 はあつた林ニ毛の毛きとツハハをとりてすまみさうする皮へその色交毛の枯れけしと云ふは  
 二老年の人用之林毛の冬リケて毛きとツハハは秋ニ毛の毛きと同やく  
 大木抄の権儀正公朝の雪よおちまよむる犬の毛のうものはうほらるもおそち  
 又行基菩薩の袂はゆふをまけり  
 後行まおし  
 そのゆられこそぬひ  
 そのかえ  
 その備マウクダハ詰テダル也

一 熊の皮行膝を弾正ケビイシ又檢非使の官の人用。事ハ武家よし  
 定。る。る。ハあ。む。む。禁裏の法定也尺素從來一條兼良公の由  
 行膝の事を書ひひ。不。霜臺サウダイ廷尉者熊皮尋るるゆに

と何り霜臺ハ弾正の唐名也廷尉ハ檢非違使の唐名也彈正  
 非違使モ法ニツムキタル者ヲ糾シテ罪刑罰ヲ行フ官ナ  
 凡故威勢アリテ人ヲツル也熊ハ猛キ獸ナ故威勢丁  
 リソレヲ賞義シテ彈正檢非違使ノ行膝ニ用ル也  
 泥障ニ用ルモ同シ意ナリ平人ハ熊皮ハ不用也

一 かに袴と云ハ草の袴也古人ハ忌々也入唐記ハ鞞カハ  
 あどもて沙俱の阿ハ背をハくべういれ也又一休イツキウ  
 と云草子もある時々の擅那カンナかむを備を恙々する

有徳院様古きるをほぬをあらぬお吹上のは庭イフキウ  
 清成の時ハ菖蒲草の袴シヤツフをあらぬ由グアは依イ  
 人の物ほせられし也

一 かにぎぬと云ハ草の服用ドウフクあるへ蜻川記ハかにぎぬの八徳又ハ  
 かにぎぬを打つて美人のはち一糸るるいづよん元は

一 古將軍家の女房元きぬをり裳モをのり袴をのりかど云り  
 為中田記年中恒例記あど小ありきぬとハかにぎぬ今世の俗よ  
 十二ハと

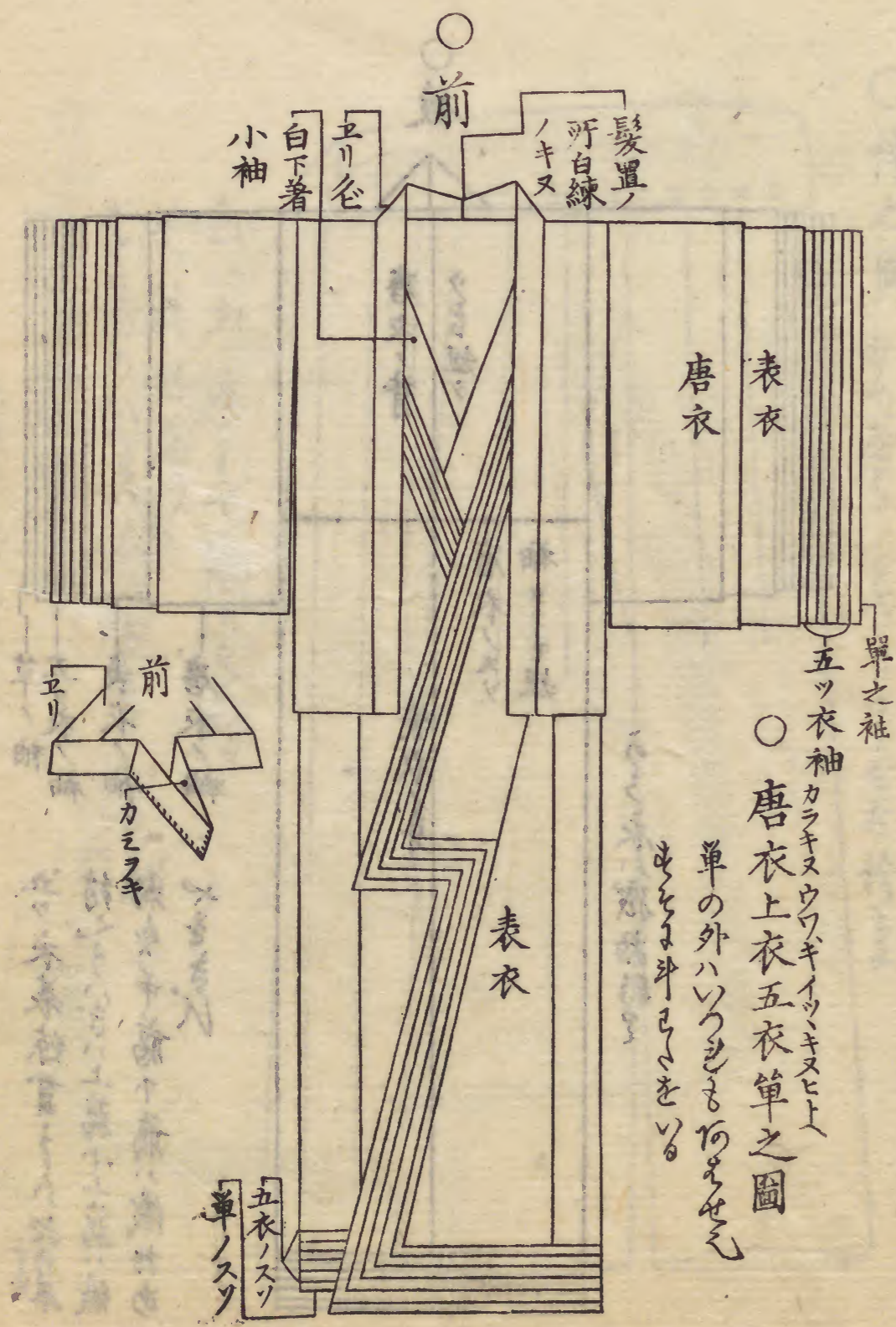
とひ裳ヒトエはうろより物之袴ハ緋ヒの袴也先白ハ袖を  
 恙々ヒトエと云ハ単ヒトエはかにぎぬをまひうちかへ小恙々ヒトエ  
 小ううきにを恙々相裳をかく也単ヒトエは衣上恙々ヒトエ

盛衰記、葉密天  
 納言時長殿、作  
 也シカレバ古堂上  
 ニモ十二単ト云名  
 目アリシ也也田  
 舎詞ニアラズ、

〇唯心院装束、東抄ニ  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年

〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年

〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年  
 〇増鏡正應三年

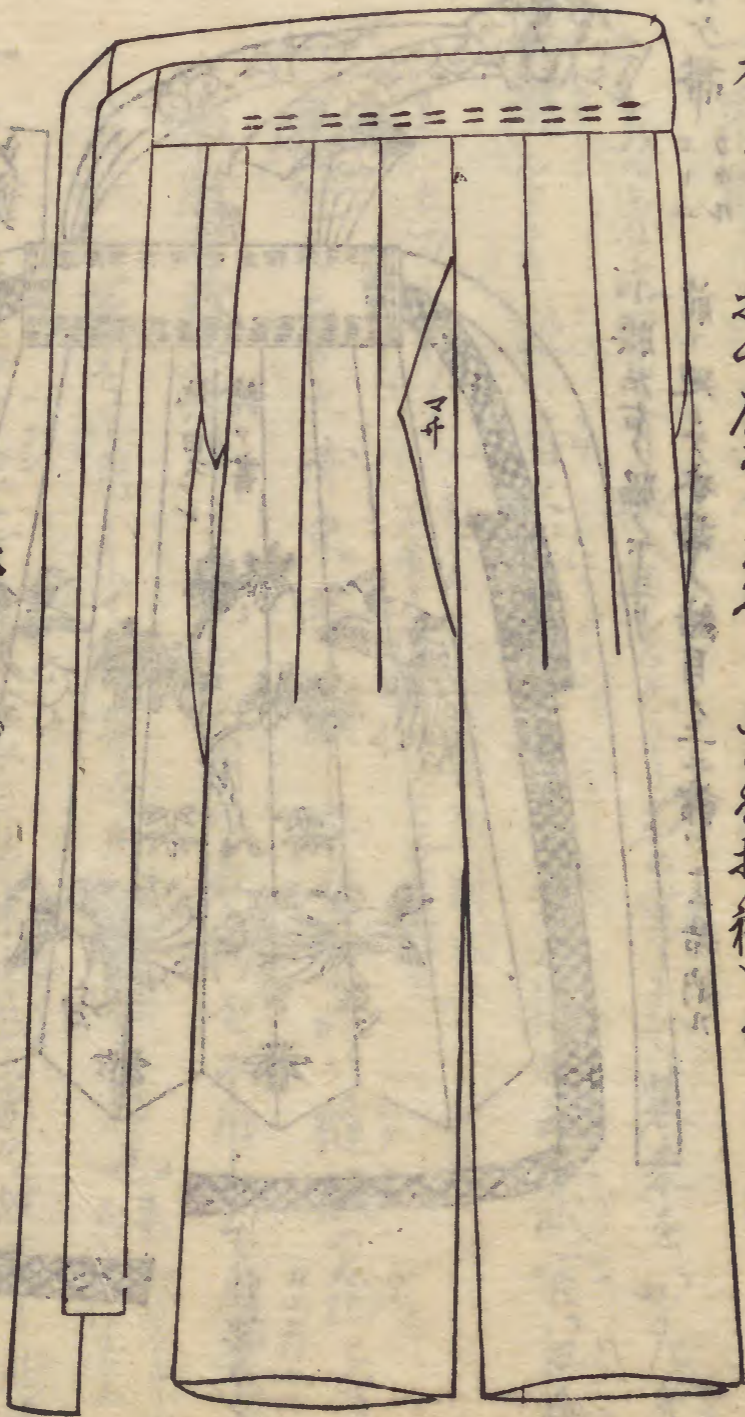


雜記五

四十一

○ 袴之圖 雜記五

色ハおろそかにして 縦よそむ  
地ハ精好あり  
その箇のひもハ衣の方とむむ

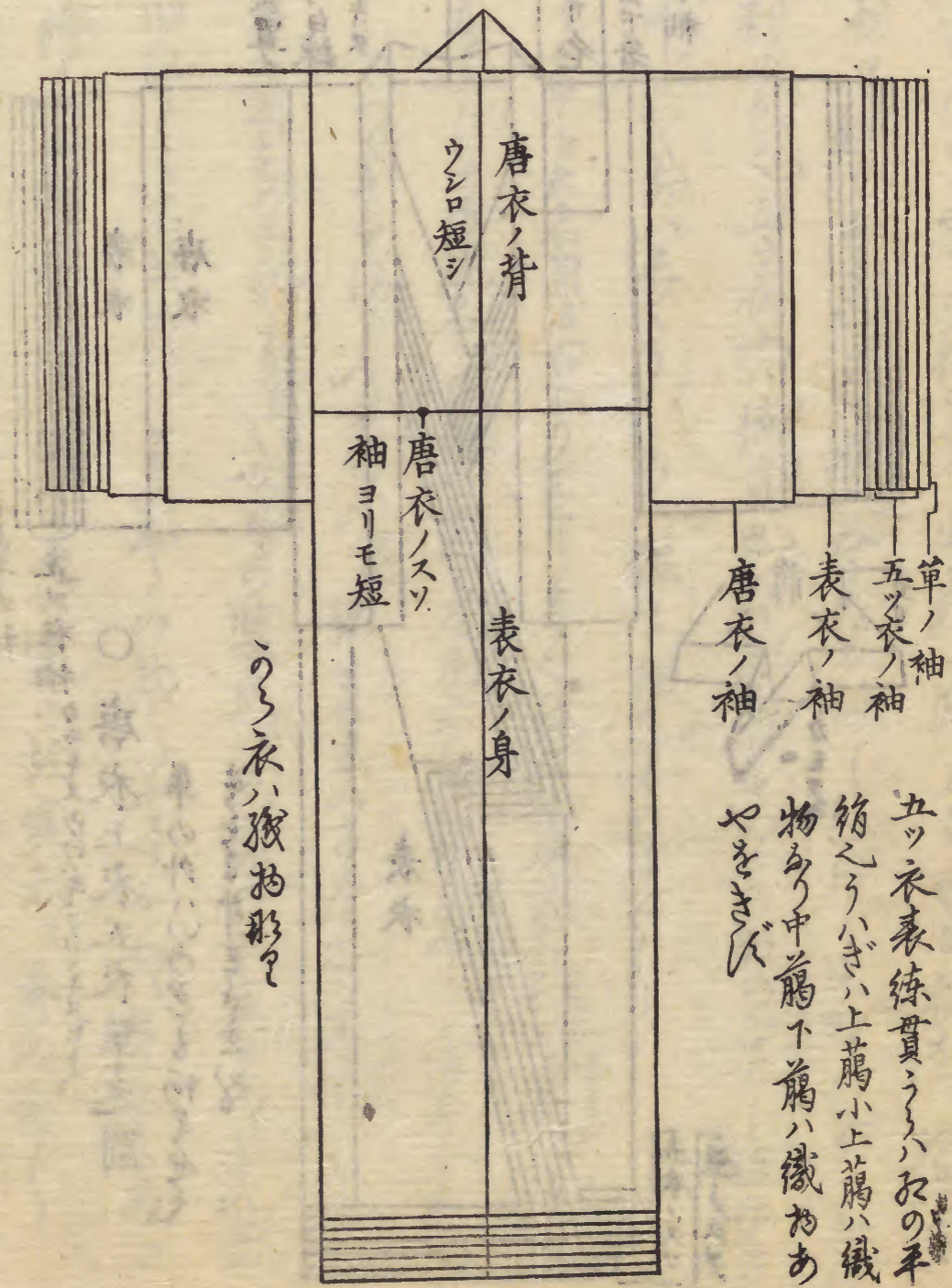


○ 袴之圖

お引可しと張るをもち袴と云  
おへ履きと云

四十二

○ 後

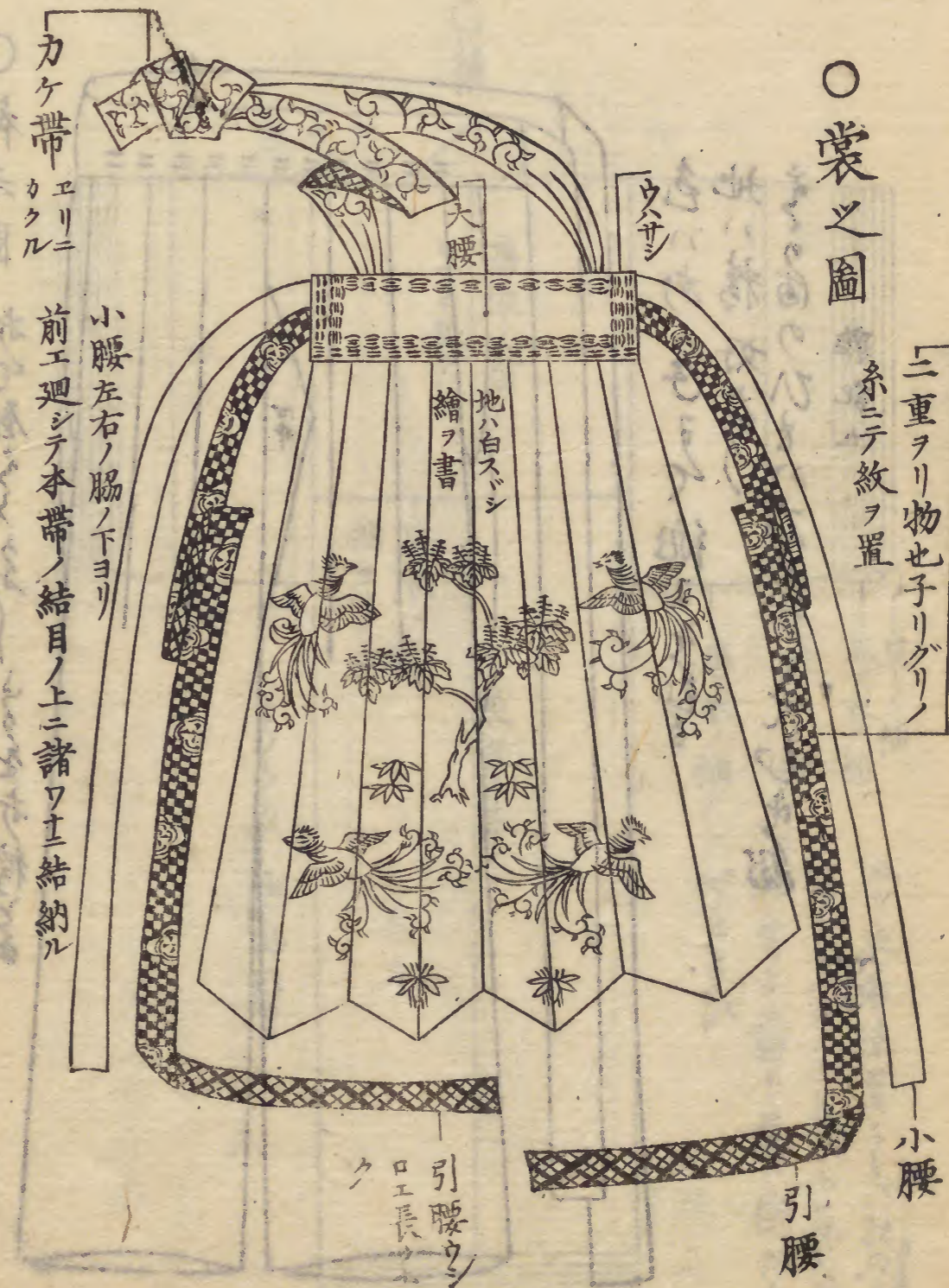


この衣ハ襦袢形

ユツ衣表練貫うへハおの平  
縮之うへぎハ上薦小上薦ハ織  
物多中薦下薦ハ織物あ  
やきぎん

○裳之圖

二重ヲリ物也子リグリノ  
糸ニテ紋ヲ置



一 束帯ソクタイとハ冠ウチハカマをかぶり單下ヒトシタカサチアコメ襷袢ウチハカマを穿イシ衿オビをヒトシタカサチアコメ上イシ袍オビをヒトシタカサチアコメ穿イシ裾オビをヒトシタカサチアコメ穿イシ

を付赤大口シタカの上ウチハカマ表袴ウチハカマをイシ穿オビ石イシの帯オビと装束イシをイシ穿オビハ平緒イシ襪イシをイシ穿オビ靴イシのイシ水イシ留イシ又ハ浅留イシ留イシをイシ穿オビ笏イシをイシ持イシをイシ云イシ武官イシハ平緒イシ

一 衣冠イソウと云ハ大袴束帯イソウの如イソウ但衣冠イソウの時ハ縫腋イソウの袍イソウと云イソウ

兩脇イソウを縫イソウめイソウきイソウる袍イソウを必用イソウぬ表袴イソウを不用イソウしイソウ指イソウ差イソウをイソウ

一 束帯衣冠イソウと云垂イソウ等イソウハ皆公家イソウの装束也武家イソウの故実イソウハ非イソウず

公家イソウ高倉イソウ殿山科イソウ殿の家イソウハ故実イソウあり公家イソウ装束イソウの繪イソウハ

雜記五

甲三

一 上古より東帯あぐるりとのをさく付る麻の太さのむらさき  
利るるありしに衣束の形やうらなありし

後多相院の比より衣文と云ふ山束の装束の形は成る

と也言倉山科を装束の家と云ふもさよりい束のりあり

天神の山影像あどを著くは今の装束のごとくことごとくかどと立

振よぐいあやまりて天神は世の延命年中の比は装束の

秋をわくのあり

一 褂と云は装束のりは是束の衣のり又大褂と云は褂乃

ゆきひを大に纏る物と云は着る物にあひ人の子孫る

物と今武家のそれをお供と少纏て常の褂よしと云ふ

又小褂と云物あり是女の着る物と裳唐衣あどを是る時ハ

小褂をいかけは着るハ小褂小袖のみくまひひり袖と衣あり地ハ

衣と云は装束の下は是の物と惣袴の仕立小袖のみ袖をハ廣

袖と総しる物とあ服をハ袖下より以不纏ひのさうぞをいさ

あひ有り胡曹抄あどハ衣の下よりきぬのつほの物あり

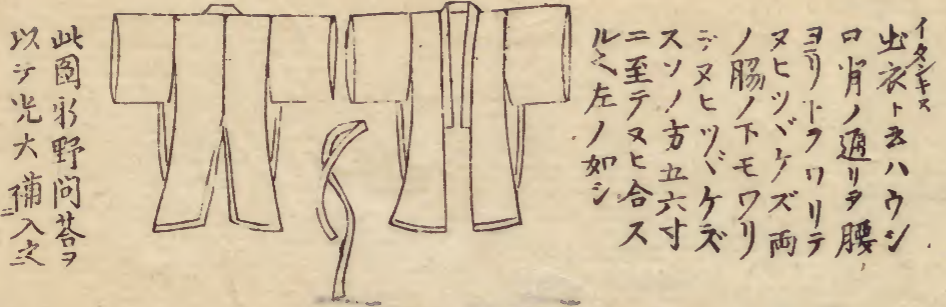
長くもさつほをいさをいさぬと云ふ

出衣と云ハ衣束あどをきる時衣の危衣の危衣の危衣をいさ

着用の袴袴先指貫を是りて腰をいさす上は衣を是く

さ上は衣束を是る出衣せざる時ハ衣を指貫の中へ是

こむは是秘るは出衣のり世俗浅深秘抄袴美葉葉ホ



此圖彩野向替ヲ以テ先大補入之

出衣ト云ハウシ  
口背ノ通りヲ腰  
ヨリトクワリテ  
又ヒツバケズ兩  
ノ脇ノ下モワリ  
テ又ヒツバケズ  
スソノ方五六寸  
ニ至テ又ヒ合ス  
ルハ左ノ如シ



見より出表をみる一腰をわひをいづる時のもく  
衣の表と裏の色のとり合せよりて名ありとの名あり  
梅葉葉葉を初め装束抄どもよきえり

一 袖と云ハ衣と同し并也但袖ハ衣よりさけ短き之袖と名付たハ  
草とハ藝のるふ表こむ故アイコメの訓よりアコメと云こ

一 腰継 或腰次  
正書 義教公活元服記 シロアラ 白襖袴袴衣紅活下袴明黄  
活袖は丈帷御腰継タテ白は指貫ト見エ物具装束抄云腰

継内上括之時用之云衣服弁覧云下括 指貫ノスツヲ足クビ  
ニテク、ルラゲグ、リ 之時ハ腰  
次ヲ用ユ ト云  
ナリ 腰次と云ハ生ノ平絹 子ヲ羽  
ニ重ナリ 或ハ布也短キ

白大口ノ如き袴也云腰次トハ下袴より短き也ハ袴の名  
をいわて腰次ト云ハ装束要領抄云下袴本儀後あり  
下括の時指貫の下は用之又腰次ハ布の袴也上括の時  
用之是も ヒトエキマ 草衣等をやめ。時のもく云是下袴と

腰継ハ二品あり一品は免ハ誤也 アヤマリ

一 下袴 シタハカマ 装束要領抄云下袴本儀後也十五歳以前の人 コキイロ 濃色キ  
紅ノ事今フジ  
カ子ブメナリ 十六歳後紅長年の後白色也文定より略儀

近代平絹 羽ニ重 下括の時指貫の下は用之云又衣服弁覧  
云下括の時ハ下袴ヲ着ス云下袴ノ形束帯ハ表袴の下は  
着る赤大口のハ但し入りまき入りまきハ袴穴あり両股の

サイをばまみえ  
よみじまくをハ  
ヨびりてよむく  
名目の有し

間よりすそ迫堅よりくくしむご重ありあり括り腰紐ハ  
右の服を結ぶ丸紐つゞきあり下袴より腰紐ハ短くは先  
別して短く結え服記は下袴と腰紐ニホを指貫の下の若  
用しあふ趣え下ハ少く不審の中侍穿あやまりし時  
二ホ並て記もや終追て可考

退紅の官位部記しあり也

装束の去は端袖と云ハ袖二幅の内袖口の方の一幅を云又

此なりといハ大頸のる又頸とい領のる

纏着と云ハ装束のたけを主人のたけとひとくちを云

宸翰装束扱ハ纏着とケトヒトシキ度ナリとあり

山伏のきぎけと云扱ハ袈裟のきふハあきけの衣の名之聖護

院敷の筆入の時よめさるきぎけの衣ころもとい扱ハウキ

色は際する麻の衣と云袈裟のあきけと云襦も袈裟の衣ハ

きぎけのきあり義経紀身七のきり山伏の衣のき

毎爰は腰をいだきあきけハはきんをきくと云まひる

むさし女人のむさしをきききぎけのきをきききぎけのき

きぎけのききぎけのきけのききぎけのききぎけのき

不動袈裟と云ハあきけのききぎけのききぎけのき

ハきぎけのききぎけのききぎけのききぎけのき

判官敷ハきぎけのききぎけのききぎけのき

不動ヶサ聖護院  
汎ニハ糸ノフサ  
ヲ付ル出羽ノ羽  
黒汎ニハ金ノリ  
ニボウヲ付ル三  
室院汎ニハ輪ゲ  
サヲ用也  
夫木抄ニ衣笠  
大臣みり  
こけぢをつま  
山ガノのす  
ハ衣蓋まぬれ  
宇治拾遺卷一身  
六象ここの外  
小きまきんを  
めの衣のみ  
きよ不動袈裟  
け木綿子の念珠  
の大あるくさ  
はくは膝入  
てこり云

太平記卷三六塔  
官然野原ノ案  
云官を踏めもて  
内供の考ともは  
樹の衣よ及く  
け以中眉まじ  
責云

小袖ニツまやもずけりるぢきあつるのうびるふくむ大口むら子多を  
いりるあつるの衣のうらりるときん目のまきもどひひりて  
とあり又糸菱ハ大せんごうんをそれが袖まらうあつるあつる  
よめちんのほぎまよんばもりそ袴のうらりるあつるあつるふゆひて  
彩まらうの長ときんをぞさげりりるあつる古のときんハ今  
の世ハ山伏ごのぶるおとハ形遠うう職人を款合の陰  
にえへる山伏のときんは時

古画は又へるトキンち  
皆め時トキンハツキン也  
後代よハちのさくしと額  
は置あり



職人  
の繪

土佐先  
信う画

一又相州遊行寺の什物一遍上人法傳記の條も土佐の條也その

條の円然野原權現の由形を山伏姿ハあつるあつるあつるあつる  
形右のめくあつる耳のお面の類の通りハ頭巾よりわりて廣く  
平き紐のめくあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
頭巾と云お也と伝傳りける由山岡俊明傳り侍り義徑記ハ  
判友ハ國原の條糸菱ハ山伏姿ハ成りるを書きりるあつるあつる  
の長ときんをそさげりりけるノ紐を云といえり然野原と云  
長ときんを用りるあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
腰當と云ハ忌服のあつるあつるあつるあつるあつるあつるあつる  
付たりる腰ハあつる紐を結之是を引友と云之引友のあつる

今時禮ノ上ニ大  
小刀ヲサヌニ草  
ニテ腰アテト云  
物ヲ作りテ用ル  
也是ハ古ハ冬之  
相ニテ近世ノ形

作古千書ニコ  
シアテトアルハ  
其度ニテハ毎々  
引取ノ百々

三強一統ニ云  
馬の人あつハ  
吹の袖を草  
袴袖細又肩衣  
もくも不若ス云  
舎人の出ま上  
下又袖細也  
義輝信元服記ニ  
装束袖細草  
袴行列云々  
貞順豹文書ニ云  
袖細ヲ用ルキン  
シヤ類用ルコト不  
可有之云々

委細ハ調度ノ部引補ノ箇条ニ記シ並也云々

狩装束ハ鹿狩ノ装束ニ移リハ袖細也今時鹿ノ袖云々由小笠原長考

の記ニ云々エヒラシヒエラ一名狩ヤナギを肩あし日記ニ云々矢ハ鹿

矢一名野矢を用又征矢をも用行膝をもくヤ出番を云々

をわづらふ者我物語ニ云々狩の笠ハ竹切イジロと云々我物語ニ

あり竹笠と云ハ竹網代笠イジロあり十郎祐成イジロが竹笠ハ云々

白ひのうイジロあり竹笠五の町政イジロうイジロ竹切イジロと云々

やイジロわんの竹笠イジロ又袴袴イジロが笠ハイジロ紗イジロと云々

竹笠河津三郎イジロが笠ハイジロえイジロぎイジロうイジロ竹笠と云々我物語ニ

云々イジロうイジロ竹笠イジロせんイジロんイジロ二イジロ不イジロ吹イジロ也イジロ又イジロ日記イジロニイジロ云々

何れもぬりまは夏巻イジロ

一袖イジロ不イジロハ素襖イジロの袖イジロを細イジロくイジロきイジロ也イジロ又イジロ縫イジロひイジロ左イジロ衣イジロの服イジロのイジロ下イジロをも

縫イジロひイジロ三強一統イジロありイジロ不イジロありイジロ古イジロきイジロ縫イジロひイジロ元イジロとイジロ見イジロハ

あ袖イジロ不イジロきイジロ也イジロ又イジロ袖イジロ細イジロくイジロ狩イジロノイジロ衣イジロもイジロ忠イジロ也イジロ

云々イジロ虎イジロの袖イジロを細イジロくイジロ也イジロ又イジロ用イジロ也イジロ也イジロ袖イジロ細イジロきイジロをも

特イジロニ用イジロ也イジロ小笠原イジロ大イジロ双紙イジロ見イジロ

傍イジロ續イジロと云イジロハ小直衣イジロと云イジロ装束イジロのイジロ也イジロ公イジロ家イジロニ用イジロるイジロ也イジロ相イジロあり

年中恒例イジロ記イジロニ公方イジロ様イジロハ傍イジロ續イジロをイジロめイジロるイジロ也イジロ中イジロ見イジロるイジロ也イジロ装束イジロ圖イジロ式イジロ

表袋イジロといイジロハ装束イジロ初イジロとイジロるイジロ人イジロ少イジロくイジロ東イジロ鑑イジロ卷イジロ五イジロ十イジロ月イジロ廿イジロ六イジロ日イジロ云

今日和歌イジロ序イジロ舎イジロ始イジロ中イジロ畧イジロ右イジロ大イジロ辨イジロ入イジロ道イジロ真イジロ親イジロ表袋イジロとイジロありイジロ表袋イジロを

雑記五

四十八

宮躰キウタイとも書也三光院内府記云法躰装束等之事参内二ハ

宮躰下ハ指貫上ハ如鈍色表袴ニヒイロノシノカマ香ノ重子フロモ衣香ノ袈裟ヒ檜扇

或持念珠マシマ大納言ヨリ参議迄ノ法躰ノ人ハ着用之内内ハ

素絹ノ二重袴ヲ着ス云々装束拾要抄ニ西三条家ノ抄ヲ引テ右ノ趣ヲ記タリ西三条家ノ抄ト云ハ即三光院内

府記府記ノ亦也 表袈も宮躰も非也表代之字本也

一 表代ハ法皇沙著キ外法門臨方善用あり尚阿沙系内の時

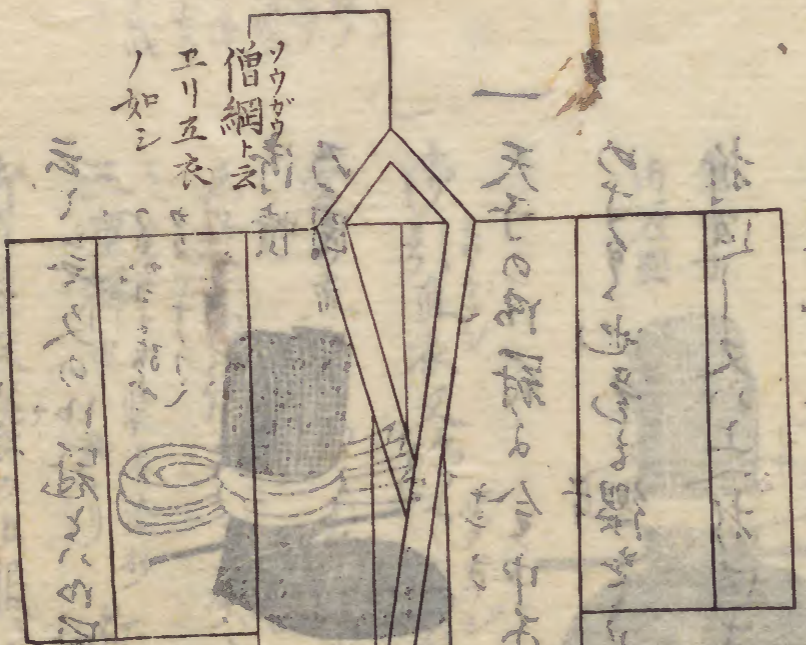
のころめきり由藝サの衣服ハあはれ表代カハゴモとい表代カユの

意ありソツ子表ハ毛皮カハゴモと縫カユる意あり

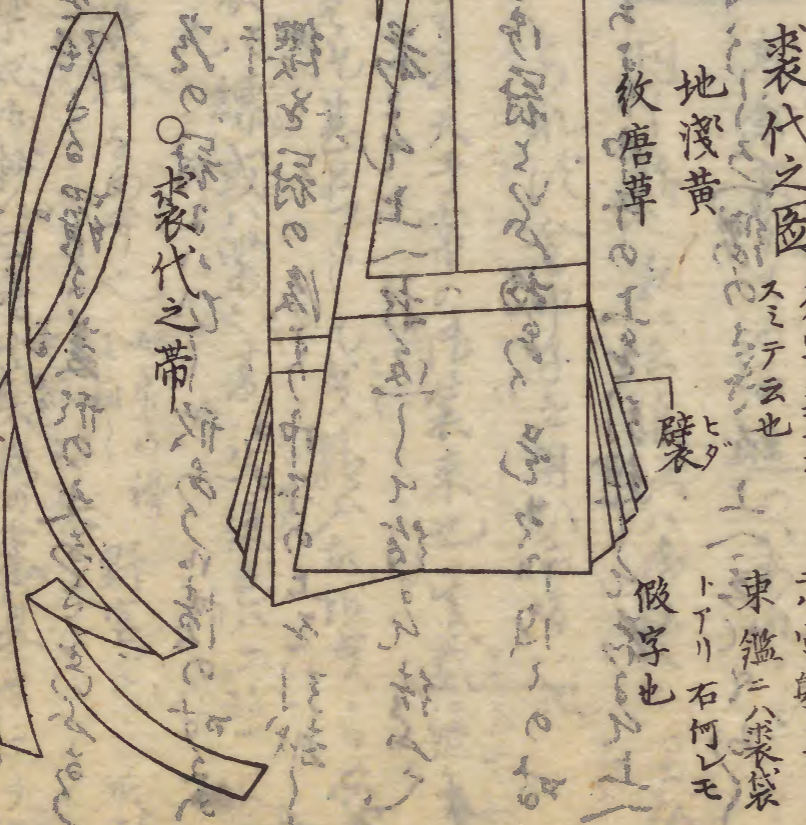
一 表代一名素絹の衣とも云但素絹ハサウガウあり其の襟也

貞丈按素絹と云ハ織文あきせ絹と縫ユリるを云之文あき

故素絹の表代と云



○ 表代之圖



一 天七の表代ソウガリ僧網ト云エリ五衣ノ如シ

一 天子の御冠カハミは法憤ホウフンの冠と云物あり装束拾要抄ニ云御神事ミカミの

御時ハ御憤ホウフンとし白き絹を以て無文の御冠カハミの巾子コシを結せ給ふ

云し是々の御冠カハミとハ御冠カハミを張カくる羅ロの菱形ヒシカクの文モンあり給ふ

ついでに後  
カタロナノ

御憤  
乃圖



右の冠ハひと形あり御憤ホウフンの時々の  
櫻エイを冠カハミの後より巾子コシの上を引越し  
前マヘへ上ウヘへ折返マヅリし給ふ結ムスめ

一 天子の御冠カハミハ金巾子キンコシの御冠カハミとし物あり是々御内ミヤの時

めより也是も櫻エイをうしより巾子コシの上を引越ヒキし給ふ上ウヘ

折返マヅリし又ハ上ウヘへ折返マヅリし給ふ上ウヘへ

御檀紙ミタンシを合アヒせ給ふ面オモも金箔キンボクまたえ中ナカを切キり給ふ巾子コシを

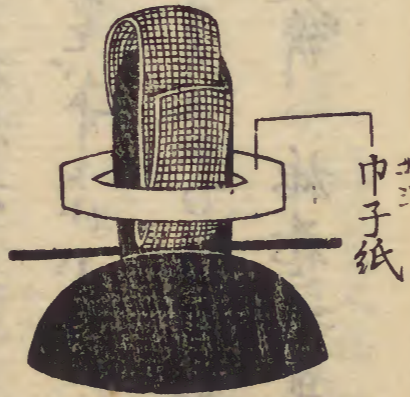
入イて櫻エイを巾子コシのまき置キ也山科ヤマノカ

高倉タカクラよりかの遠トホの六ムあれ

同ナニく拾ヒ之シ私シ云ク近代キンダイハ御憤ホウフン

られ給ふ金巾子キンコシを用ヨウひらる

金巾子  
御冠圖



一 御引直衣ヒキナフシ又御下直衣サゲナフシも云天子常ツナギの法装束也ホウサウゾクニ云

常ツナギの直衣ナフシのめくえ後のまき甚長ヒトシく

云冬フユハ白綾シラガサ文モンハ小葵コアヲヒ裏ウラハ縹ヒナガ或ナハ紫ムラサキ其ソノ生綾ニシヤク色イロハ二ニ

三重ミヘ襪ダスキ也ニ装束サウゾク法抄ホウショウ紅ベニ張袴チヤウハカマをめすメ女房メヤの袴ハカマ

御引直衣ヒキナフシ装束サウゾクの御服ミフクハ禁秘キンヒ法抄ホウショウ曰冬フユ小葵コアヲヒ縹ヒナガ裏ウラハ紫ムラサキ其ソノ生綾ニシヤク色イロハ二ニ

臣下シノ御引直衣ヒキナフシ甚長ヒトシく被カ曳ヒ給ふより御引直衣ヒキナフシ裾スベハ

御引直衣ヒキナフシは紅ベニの袴ハカマ也  
法憤ホウフンは長袴ナガハカマ也  
太平記ヘイパキニ紅ベニの袴ハカマ也  
玉タマハリシトアル也

山科堯言引衣五上常若涉甚文ノ名三重祥色名後條二藍冬

白文ノ名小葵ノ後白粉張常ノ衣ノナドヨリハ長クシタル物之裏ハ標夕

或ハ紫也○高倉永福云涉引衣冬白後法文小葵夏二藍

三重祥或法サゲ衣下云 右ノ三所ノ説ハ新井後守源君  
美在京之間三家一問ヒタル時三家

法答ヲ記シ玉ハリシ  
書ニ見ヘタリ

一 小口コクナの法袴ノ西宮記云小口袴冬耐主上着之深紅入綿

或歩○大槻秘抄云ハ小口ハ袴ハ耐ハ主上ハ着ハ之深紅ハ入綿ハ

〜とあるハすハ小口ハの法袴ハ小葵ハの後ハの紅ハの法袴ハ括ハリを

さハ〜とあるハハ侍中群要云小口ノ法袴如指貫者紅深後

也或ハ入綿○梅花葉葉云小口法袴紅梅頗濃色指括如シ

指貫冬ハ練夏ハ生ニ真丈按紅梅濃色ハ紅ヲ云也  
昔紅梅ト云ハ紅梅ノ花ノ色也

一 紅梅ト云色二品あり上代ハ紅梅ト云ハ梅色ノ濃きを云良紅

梅ハ花ハの色也後代ハ紅梅ト云ハ赤ハ紫交ハ之赤ハ多クニハ

る色を云ハ織ハ多クニハ後赤紫緯糸ハ多クニハ原氏物傳

あハ〜何ハハ紅梅ハの花ハの色ハと心得ハ〜

一 後ハの文ハ小葵ト云文あり葵ハ大小あり大小ハ花ハもハ葉ハもハ同ク

て五月ハ花咲ク罌粟ハの花ハ似テ〜 葵ハ冬ハ葉ハあり 大ハ多クニハ花

ハ種ハ三寸ハありハ小ハきハ花ハハ種ハ七ハ分ハありハ是ハ小葵ハありハ倍

ハ後ハあハひハ云大サハ後ハ布ハありハ也ハ也ハ此ハのハ花ハあり

一 装束ハの書ハ穀トとハありハ是ハハハのハありハとハありハ又ハ紗ト

物具抄ニ紅梅ハタ  
テ紅ハ又ハキハ白ハトハア  
リハ是ハハハ紅梅ハ花ハ  
色ハヲハ以テ織セ也

大葵ノ莖高サ五  
六尺モアリ小葵ノ  
莖ノ高サ一尺六  
七寸ハカリアリ



のこころひまて目のすきこもすき残あし生糸も織也

此織る物糸目<sup>○</sup>ははるんもみ糸の  
形のゆゑあふぬあおると云也穀<sup>コメ</sup>め<sup>これ</sup>の



字<sup>コメ</sup>穀<sup>この</sup>これハ<sup>ユウ</sup>の  
也<sup>この</sup>字<sup>し</sup>

似る字偏の書れ糸ト糸トの遠なり

めはるも有り亀甲のぬけ

一 固<sup>カタ</sup>文<sup>モン</sup>浮<sup>ウキ</sup>文<sup>モン</sup>と云る文といはんづうの多し後の文を糸をまつて

てかく残るを固文と云糸をうらむ織るをうけ文とい  
也うけ残る云也

一 浮<sup>ウキ</sup>線<sup>セン</sup>後<sup>ゴ</sup>と云ハ後<sup>アト</sup>の名也線<sup>イト</sup>ヲ<sup>スナ</sup>浮<sup>ウカ</sup>ル<sup>レ</sup>後<sup>ゴ</sup>と云ハ織<sup>オリ</sup>紋<sup>イ</sup>の線<sup>イト</sup>を  
うらむ織る後也身<sup>ウケ</sup>浮<sup>ウカ</sup>織<sup>オリ</sup>の後の惣名也



此紋を浮線後の丸と云ハの<sup>ウケ</sup>後<sup>ゴ</sup>は丸<sup>マ</sup>ハ織<sup>オリ</sup>を  
織る丸<sup>マ</sup>ハ織<sup>オリ</sup>をうらむ丸<sup>マ</sup>ハ織<sup>オリ</sup>の丸<sup>マ</sup>と云るハ  
なる也古ハハ織<sup>オリ</sup>のうらむ限<sup>リ</sup>外<sup>ノ</sup>の紋<sup>イ</sup>を後

の糸あでしこのあせんやうは郊の花をぬひうけとあり是ハ  
あでしこをうけ残る<sup>ア</sup>後<sup>ゴ</sup>の多<sup>ク</sup>を云也又伏見院宸翰装束抄

は上袴仕年ノ人浮線後ト称シテ白浮織物文ハ小石<sup>コイシ</sup>ト云<sup>ハ</sup>霰<sup>セン</sup>  
其中ニ有<sup>ク</sup>窠<sup>カ</sup>文<sup>モン</sup>ト云<sup>ハ</sup>又<sup>ハ</sup>そり

一 二重織物<sup>フタヘオリモン</sup>又ニ倍織<sup>フタヘオリ</sup>と云ハ織<sup>オリ</sup>の<sup>上</sup>に<sup>後</sup>織<sup>オリ</sup>を<sup>志</sup>う<sup>ラ</sup>を云也極<sup>キョク</sup>糸

葉<sup>ハ</sup>親<sup>オヤ</sup>玉<sup>タマ</sup>山<sup>ヤマ</sup>装<sup>ゾウ</sup>束<sup>スツ</sup>の<sup>糸</sup>云指貫濃紫二倍織<sup>フタヘオリ</sup>地<sup>チ</sup>文<sup>モン</sup>亀<sup>カメ</sup>甲<sup>カ</sup>上<sup>ウ</sup>文<sup>モン</sup>白<sup>シロ</sup>浮<sup>ウキ</sup>線<sup>セン</sup>



二重織物の付後  
の文をハ地文ト  
云織文をハ上文  
と云々常々、後  
の文をハた文  
と云々云

衣名  
虫襖 表青黒  
裏花田  
比金襖 表青黄  
裏蘇芳  
是モ葉葉ニ見エ  
タリ右ノ襖モ青  
ナリ

リヤウモン  
後文云、是ハ濃紫色の後ハ亀甲を織りたる之を亀甲の織り文の  
上ハ白多ク浮線後ハ丸を織ひたる也法書常用抄云公方  
様軍陳のハ衣袋を織おきり丸を三不ハ付れ丸ハ白地ハ  
赤、きりハ白、紫ハむらさきカ元キ云々重織物トハ二重後物の事  
あるハ桐の丸を織おの事織物トハあるハ  
白襖と云色の事胡曹抄ハ白襖水色と何クハ外モ襖乃  
字付たる色ハ皆ある色と心得テ襖ハ表の字の代ハ用ひ  
たる也元来襖ハ装束の名也記す色の名ハ非也然れモ古文字  
の吟味モあり表の字の代ハ襖の字をモ書くる也

縮線後と云ハ古装束ハ用ひテ後ハ縮線後トハ名あり又

志ハ羅地ト云志ハらををて織りたる也志ハらと云ハ縮の字を

むとむ之地ハちみを取多しハ志ハらのおきを尉斗目地の

後と云ハ装束のおよ志ハら地の後

縮線後と云ハ襖ト云ハ線ハ襖ト云ハ後也襖ハ字の心を

随分精々念を入るを云ハ糸の事ハ念を入れ極上の

糸を取たる後を執ハ縮線と云ハ

真後ハカヨリヤウ  
真後ハカヨリヤウ  
真後ハカヨリヤウ

魚陵注ニ山越此ハ説のみハ魚陵ハ漆意の名ト云ハれど

志ハハ誤あるハ平治物語よりハ生年十九歳後ハ

魚陵のひされとあり参考ハハ様り色を極のぬきと何ハ

光大曰或説云  
真後といふ今世  
あつて此と云  
くありてハ真  
の子の神也  
也真のけり  
のゆくあり  
云よそ真後  
とありて  
かよひや  
祀之

枕草子よき  
ありぬの多き  
ぬのあき  
つれもき  
げりの中あり  
つろのきぬ  
きよあけ  
云ハ  
て  
也

練と云き色と  
云ハ枕草子春暁  
抄北村季吟  
也出云を記  
既也用へ

此之練と云ひて此は真後と云ふは練は練の名あり

一 盛衰記の抄に云ふ真後のひきれあり又曰く是は練の生絹

魚後の垂糸あり是は練ハ是は練也

阿比羅文の事と思ふ也 壺井義和の説は魚後の御料也天子美祿の原料といふは説よりて文字を

作らざる用たり或説は真後ハ真浪也浪ハ真の形を織る

おろしと云ふは推量あり推量の説あり用たり相真後を

いふは練收をいふは詳あり知るざるを云ふは

練色の事明月記ニ云文暦二年二月九日春日祭中裏 行光白織程

東鑑卷四于時改以新法装束 練色 水干 著素服給て外古記

其名を云ふは法は装束抄に云名を出さるは

貞丈按云は 膳抄下製黄柳の条に云仁安二山二臨時客

或秘記曰尊者左大臣 經宗 黄柳下重面薄黄如練色裏濃黄

赤色云は此文は據て考ふる練色を白くしてか ウスキバニ

色也 畧説は絹を練りたる白きまの糸ともいひ或ハ

練 子リノウズモ 是は練ハ練織ヤハ穀のごとくわたりて練色

と西三条装束抄に見る 穀ハこああり

一 びろきん色の事牡丹色也清少納言枕草子より云のまは

禁中侍敷 の名也 うしれ せんはせんめきおのき事あり

ありお村季吟の抄に云たんハ牡丹とあり梅蘇葉純

衣の色異院の内四月の衣の形はげんおめて白く

お梅かさ移りありて 盛中四代は四月ハげん

物のしほ 練貫 練貫 赤い色のひおどしとゆう赤くし

わいし何り白き練貫はあろうを付るを云右あをを以て  
考すよりすお色を四月ハ布うん云也

一 蒲萄條のり日本紀天武天皇十四年秋七月乙巳朔庚午

初定明衣巳丁進位已上之朝服色 同上 追位深蒲萄進位

浅蒲萄 ○衣服令白九服色者白黄丹 中畧 蒲萄 義解云蒲

萄若紫色之最浅者也 真丈云是 延喜縫殿式云蒲萄ハ

綾一疋紫草三斤酢一合灰四斗薪四十斤帛一疋紫草

一斤酢一合灰二斤薪廿斤 ○按紫色ハ今世京紫と云色

也蒲萄ハ今世江戸紫と云色也草花ノ色ニタトヘテ云ハ花

和名抄  
蒲萄  
衣比加豆  
良不義

菅蒲ノ花ハ紫也杜若ノ花ハ蒲萄色あり 京紫ハ赤氣切あり

蒲萄のるを今ハたうと云之めたうの實をけ紫色あり紫

色をえびと云之濃紫ハ色黒一は一位の人の袍の色

是ハ禁色と云二位以下の人ハ多ク禁制之二位三位の人ハ浅紫

の袍を云之ハ浅紫と云ハ黒うす紫と云之ハ中紫

の多也右の浅紫より少る者キ紫をえび條と云ハ山家首

首水邊杜若と云之題を源仲西のよめるたれ守む山下

の也守るもむ一をびそのの多ク暖なり

麴塵と云色ハ崩黄の黄がちある色 修キキチン

海松色ハ緑色又黒とあるを云木賊と云 修キキチン

雑記五

五十五

一 朽葉クハバと云ハ黄色のうもゆる也 倍ニキカラ 黄朽葉と云ハあり

一 黄朽葉と云ハある云朽葉と云

一 羅ラの織目 ヨコ 緯ぬると一文字経タテをさくひと

一 装束抄イセは平絹ヘイキヌとありハ今世倍ハブタニ羽二重ハフタヘといふ物これ装束の裏

は用る也又五位イノ以下の裾表袴キヨウノハカマあり用おと

一 冬の装束ハ練糸ネリイ見織ミオリてありめききとをさく夏ナツの装束ハ生糸キイト

練ネリザル トリトリとて強ツヨクてありめききとをさく袍ロウ並ナニ衣イ以下皆同

一 管形ハコガタと云装束の文ウチの多オホシ名目抄ナメ云管形ハコガタ形カタ非定ヒテイ文ウチ際サヘ装束マツと寸

多オホシ下シタ襲ウラヒ用ヨウ之ニ 非定ヒテイ文ウチ下シタハ何ナニニテ 台別記ダイベツキ久安四年九月廿五日

一 敕使シキ祿ロク之中ノ 秋管形アキハコガタ織物オリモノ唐衣カラキヌトアリ又管見記ハコミキキ云喜キ復フク

三年四月廿三日八幡行幸三位中将實雄著松重マツナカ下襲シタウラヒ松重マツナカ拾シウ形カタ一管形ハコガタニスル也 ト見タリ管形ハコガタハ四方シヨウホウある圍イリの内ウチハ草木ソコノキの

花葉ハナハの類折曲マクマクて文ウチハ付也何ナニと定テイまざるあり 畧リョク説セツハ管形ハコガタとて

形カタ◇ダイダイ外ソト穿スリあり物を付ツケハ古コの管形ハコガタを知チずしとてさく 文ウチ格カクも存ゾンき管ハコの

推量ツイリヤウとて推オシゆるあり用ヨウありとてあり 一ヒト斤シユン際サヘと云ハ大オホシ一斤シユンを以モツキ一匹ヒキの絹キヌを際サヘと云あり保元

一 物モノ終ハヤシハ安藝判官ヤシノハジメハ一斤シユン際サヘ絹キヌハ白シロ青アヲの狩衣カゲイと云あり

一 片カタ色イロの多オホシ當世トウジ片カタ糸イトと云ハ練ネリの事コト也色イロハ何ナニ色イロと限リミらず

一 疎スの比ヒ麩目フメ比位ヒイの宣ノリしきを片カタ色イロと云也

一 里リ々リもんもんの強拍ツヨクのり室町ムロマチ殺行幸記コロシヨウキ云々もんもんの強拍ツヨク一斤シユン

一 ともり又太平記タウヘキ中ナカ教キョウ以モツキ余ヨリ系ケイ征夷大將軍テイイダイシユン正マサ二位ニイ大納言ダイナノゴン係ケイ

室町殿行幸記  
二後文下書タリ

治承三年三月三日  
日山撰記云右衛門  
權佐光長茶漆  
一斤際立烏帽子  
トアリ



女房故実事二  
三四月一月の原  
もの帯もあつ  
せんとい

ま、後フ字六時  
ウドブ七巻也

枕草紙の  
さもの、あつ  
あつとせん  
水事抄事記云  
上篇すはを  
うめん、あつ  
内付あつと  
一を後云

朝臣義詮所守きのまゝのありおのきよきよのきぬを  
出、きのきぬ也又菴中日記云四月一日は小袖まゝのあり  
かゝるゑのしよばあゝのたごひとありまゝのあり  
幸之綾文と書レウウ 音通すも綾文ト云平絹ハ對  
いさる也 平絹ハ今云 綾文ハ地あゝるゑ糸の  
糸系ト云ハ糸系ト云平絹ハ地平と云極上の  
絹也有文を綾と云母と云平絹と云装束抄と云枕草  
子もあゝの表袴と云ありまゝのありと云と云  
おぼろもあゝの綾と云ハ綾と云浮線綾勢徳綾と云  
の綾方と云の名あり

この大御后とハ  
花園大御后仁  
也ハハ浦仁親  
也也三末院ハ  
孫後白河院ハ  
稿子

一 装束はおと云るありおのお衣あゝの類之是ハ  
出、る也後世ハ板引と云ても古の伎あゝせておとと云  
て装束のりよはる草ハををハ  
板引といふはるゝあゝの板引糊をなせもろ能りて  
引もあせハ先物と云をぬり  
引倍文ともひ(キ)とも云ハ板引のり也  
螢 又あゝる とも云ハ張る絹を具えん  
て先をを出せを云也

一 衣文の始のり 綾世綾お語卷八の巻に大將殿ハこの外  
も先物をぞこを給くゝのきぬあゝのきぬあゝのきぬ

雑記 五  
五十七

こまのふあつめの子をそのなまきれあつた大さ昔はうのさ  
 ちぞきぬきもあつたをなほしとこまぬきもあつたあるじ  
 このはるをさびおほりきつぬきをへりあつたつて侍の白河  
 院ははるきとくあつた人をあつたつてひまろつてひあど一集せけ  
 れはさふあつたひまるとつて侍りいづつてつて世はあつた云く神皇  
 正統記はあつた院は容れぬたつたつてつてつてつて好させぬひ  
 つつとや装束のこまをなりえ侍りのひまあつた云つてもよより  
 出来し身花園の有仁の大臣又あつたつてつてつてつてつてつて  
 ド風をありよけるをせける 貞丈云衣文と云ふの始まるとるも一若  
 くつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 やつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

一 紋を丸の内は画する永正年中立雪富う画一諸家紋は紋の  
 外は丸を画するあつたつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 人の好むつてもつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 紋はつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 相焼付又云公方標は赤力は目貫糸のめく丸は相やちつけ又  
 赤剣は目貫丸の内相焼付とええつてつてつてつてつてつてつて  
 紋も好むつてもつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 氏の紋 **十** 文はあり何はより丸丸の内は尊勢もあつた十文字  
 もあり一也

さびくはらうるまを同やうの本の美なきよげあるものぞら

志なきふし祈りあごきし葉花おほは裳表の巻より中をさすうら

かざるくろきりいなりまをせしきし掻練といふもの緒は

對して練なる緒を掻練といふは掻字ハ虚字ハ捲の字は何の心も

あれたつてしたとハ紛くと云るをかいゆと云破る云るを

かいたつて云をさるをさるをさるをさるをさるをさるを

云はれぬれハ古代の羽は練たる緒のるを掻練といふあり

法の装束抄どゆは掻練をまきまのるとしてさあぐの尻あり練

どまきのるよハあふふ祈りたる緒のるは白きく好く書きうね

いとあつをいであさぐー又葉表の羽は白き

ういぬりハとあゆふあり色は何そよも漆ト

一装束のつりよき衣の着る白衣之束帯の付ハ天子より臣下

の節日迄アあるよ美ありてあつとハいこつさるものよらま

くしてハツキアハ衣冠の付ハ三位以上ハ二アある四位以下あり

タウエキ當きとつハ二アありハ位袍といふ位階ハ相當の度を云なり

位袍トハ一位深紫二位三位浅紫四位深紫五位浅紫六位深

緑七位浅緑八位深緑初位浅緑是合ト云書ノ中衣服令ノ定法

ナリ受テ時二ハ八禁中ハ公るを糾つすハ手後を勉めよ

装束を公より配り當て賜するありそれを當多と云ハ錯抄

ハ舞人小忌組舞ノ条云仁平元十廿五秘記日臨時祭舞

人隆長少時青摺私調之當色頸紙不合期故也又摺

袴ノ条目以公物著用之但下袴津賀利系ハ私用意之ハ中界仁

鑄抄舞々下襲付  
半臂ノ条ニ云同可  
用公物に安ニ三  
臨時祭殿殿勤仕  
舞人給也或此年  
結構之人私調之  
著用非無先例同  
首書曰仁平元十  
一時祭舞人隆長半  
臂當色下重

私儲之當色袴  
麻惡之故也

此文公物ト云ヒ又當色ト對シテ私儲ト云ヘリ

然レ當色ト云ハ即公物也此文意ヲ以テ案スルニ其後ニ付テ公

ヨリ配リ當テ賜リテ著スル服ヲ惣テ當色ト云十九ベシ紫式

部日記采花物語等ニ上东门院御着るヲ書ル奉ニ宮ノ下

部ニドリノキ又ノ上ニ白キタウシキ着テ御湯冬元ト云ヘ

ルモ公ヨリ賜リタル白キ袍ヲ緑ノ袍ノ上ニ覆ヒ着タラ云

也御着屋ニ白キヲ用ル故公ヨリ白袍ヲ調シ賜リタル

也サレハ白キ當色ト云ヘル也此ニ品アリ一ツヲ六非ず

武宗ニテ召連ル白張着タル中間ヲ當色ト

云モ主人ヨリ白張ヲ領ヘ五八九故當色ト云ナリ

津衣ト云ハ白キ狩衣ノ裁縫替々多ク布本也或ハ生絹之是

を著る衣單キヌヒトエホをカチカハリ著る狩衣カチカハリの如

コハク張ルナリ衣單キヌヒトエ

十ド重ルコトハナシ

白張トハ別ニ白張モ白  
布ノ狩衣ナレハ是ハナリ

一 褐衣カチカハリトハ隨身ガイニシの著る服之腕腋ウデアキの袍カチカハリの如く凡ある腋ウデを隠カチカハリひか

さぎらぬ袖カチカハリの紋カチカハリをぬひ付る蛮ババ絵エと丸カチカハリく獅子シシ孔クシ有アる者カチカハリを

の形カチカハリを付カチカハリタ也一狩カチカハリ狩衣カチカハリの両腋ウデをぬひかきさぐるガゴト又

古書カチカハリの褐冠カチカハリト云るあり是ハ褐衣カチカハリヲ後オヒカケ付カチカハリする冠カチカハリを云

カチカハリ 後ハ馬尾カチカハリニテ扇カチカハリヲ開カチカハリタル秋カチカハリノ如ク  
作カチカハリタル物冠カチカハリノ両方カチカハリノワキニアルナリ

一 小袍コハクト云宗雅カチカハリ御記カチカハリ仁治二年正月昔今上カチカハリ階下御加冕カチカハリ之日也

次召内藏頭顯氏朝臣カチカハリ著當色カチカハリ注云 爲カチカハリ色袍面カチカハリ表カチカハリ日色無

簪カチカハリ袖カチカハリ云台記久安六年正月能冠カチカハリ右中弁光頼朝臣著紫

又云小袍ハ堂上  
元服之日能冠ノ  
人著用之スル也



小袍コホ云々小袍と云ハ常の袍は遊す袖一幅と端袖カクシあり  
小袍と云あり袖袖ノ一幅ヲ

一指子サシコと云ハ平指の指貫也サシコハ指貫の小袴と云あり

今世有文ウチあるを指貫といひ世々あるを指子と云て是別を  
云々本ハ一也有文ハ紋イシありを云々文ハ是地チありを云々

一袍の襷ハタ入紐イシヒモと云る古ハ袍の襷入紐を付り人のかゝぬ

多し江決身内毎細記篇元日内監既来立仰云召式ヤウの司  
兵乃司二省丞来立注云近代昇自階不可然壇ダン下置少石  
踏之昇也仍此日二省丞表衣襖ウレキマシ放ツ又古今六帖組草枕  
結ムスを志先シひくきそけざうきそけ下のいひも云々今の

袍ハ領ネリの入り紐あり古の袍ハ襷のつ幅も入ひもあり襷ハタハ

細長ホウチガの事童子コナリ者女とも幼き時ハ恙用せり也女官

鐙抄フシハ云奉殿フタ者細長ホウチガを著る皇太子幼童の時恙

白襪物也源氏水滸抄云未通女オトメの恙物オトメ云々持衣オトメのい  
この括カケなたる三幅ミタマと云り身ミ幅袖タテ左右二幅を纏カケて紐

を括カケる也延慶四年園大曆云沚細長ホウチガハ身長四尺五寸ハ身廣  
六寸五分沚大頸オビ上四寸三分下四寸七分沚袖引立一尺七寸沚袖弘タテハ寸五分

又公賢公日記云細長身ホウチガ幅袖左右各一幅タテ云々身ミの長  
四尺四五寸袖の長一尺六七寸の由見ミたり服オビ鐙漫語フシハ云

引まハ袖ノ長  
サ也

細長の幸二の者女房のち小褂の上よ着る物にて小褂の  
 めくんとあひらびのあき物と童の装束は細長といひ陸  
 王らとんの袍のさきしき水干の袖は行は長き紐付と  
 きと又源氏水滸抄云若きんぶら女御冬の時きをとりおも  
 美用とて女房装束抄云用細長の時不用<sup>女子の時</sup>袖袴ホ云女  
 房の着用も細長ちあひらきと幼童の時も男用とて細長  
 ほかびあつ也け差別あり又保元三年正月廿九日兵範記云  
 關白殿才三若君涉元服涉装束細長袍指貫ヲ召云し  
 男子之時ハ細長とて貴を用ゝれ女子の時ハ袖袴を  
 用ゝれ也男如くも美用差別あり

一練の多新野問答云後續木を練と稱し不練ハ生  
 まて練貫ハ生の糸をたてて練する糸をぬきとて残さ  
 絹を練貫と稱して十六方以上卅方迄ハ小袖を束帯の下よ  
 用中練貫とてきを見女子の新ひ袴と斗略とてやひ  
 うんせれてんこふ練りと斗中練と存せり今世はぬ  
 と斗云ハ練貫の地乃存き也

一武家内衣のちれ難くせ云と垂垂の下の小袖とて別あり  
 習ふり不て習ふり大まびらの時ハ必白少袖と云と別はあつるあり  
 元手あつるを用ひ  
 垂垂とていふも  
 のちよ白き小袖ハ又云垂垂の下よれぬん小袖ハあり

すゞも不苦ゆそ外小袖同初ありおめく有るおるすじ止禁  
 惣とせゆ又此供故實云重垂の下よりいん小袖ハありす  
 正外襟小袖も苦ゆありおめくもまきまきとせゆ又裾も  
 異本云大帷の時方白き小袖を着け給も同初又表抄の時ハ何  
 れの小袖も不苦但ありおめくもまきまきと目立異  
 相ありハ表ゆ中よりいん又奉公先悟と云男の甚の晴ハ  
 白帷子也若元々別位也又此成次牙故実云大帷の時  
 ゆいんおる小袖白小袖とせゆ給も同初と云。伊勢守  
 貞國朝臣の像重垂の月衣けりおぎの小袖ハ花色小袖を  
 有る若せぬし許えと云これハ武家式云大帷を穿る  
 の時

ハ白小袖常ハ何色もとも着用帷子の時ハ白帷子常ハ何色も  
 とも着用也帯も表裏とも同じこの帯を穿る也  
 一 直綴と云ハ入道の着る物と云是方の僧衣也  
 一 浅沓ハ木とせ作る相の木を彫り作る也但是の甲と下ニツ  
 きて合する漆とせぬくぬくぬく也浅沓の形老の如し



公卿のゆい浅沓ハ底を  
 下装と云装束のきぬと  
 とも也武家もいん何乃  
 きぬもいん平沓と  
 を穿る

右の浅沓武家もいん式の大的の時とせ

武具之類を合

一 鼻高ビカウといふ沓は皮を以て作り鼻を高く拵上げて作る也

一 深沓フカクツハ靴といふ沓の多く物具抄ハ靴深沓同夏靴云々靴の後面ハ装束抄圖式に入らざる畧之

一 袖拵ウデヅクリの事狩衣水干長縮直垂等皆袖拵と云袖口を結ヒ大針小針交て刺也今世武家の直垂ハ袖拵有りて袖口の内ハ結を付て瘧と号す是古風也公家ハ用くたハ袖拵ありてと云ハ元袖拵の結の條を云也 袖拵ハ狩衣より起る也狩衣を

直垂垂ハ袖拵あり古風あり

舊拵の寸舊今の舊の事服也袖のゆききくして舊を法サマシうサマシ妨サマシありぬ袖をサマシひサマシびサマシはサマシ後サマシりサマシ寄サマシせサマシぬ袖拵の結を

志めて結垂也水干長縮ハ庶人庶人といふ禁中よなきの服せぬ者の人をさす見ておれハ陰す手をつひさくうくびきるハ袖拵の結を

没コナラシる也又公家のコナラシ小直衣ハ一名狩衣直垂とも号して狩衣の

此サマシもサマシ襦サマシをサマシ付サマシるサマシ也サマシ元サマシ狩衣より出サマシるサマシ拵サマシありサマシハサマシ狩衣の如く袖拵もサマシありサマシ也サマシ申サマシ虎サマシと云装束も狩衣より出サマシぬサマシハ又同サマシ袖拵あり

一 昔の夜具ヒカシハ直垂と云拵あり夜具ヒカシのゆヒカシハ衾フスマと云四方ある

かの也それを被イりて寝イめる也天子をイめ皆イ此ありしに袖エリソデふエリソデりエリソデのエリソデ比エリソデ下エリソデりエリソデ衣エリソデのエリソデ如エリソデくエリソデ領袖エリソデをエリソデ付エリソデるエリソデ拵エリソデありエリソデとエリソデ云エリソデ形直垂ヒカシハ似ヒカシるヒカシ拵ヒカシありヒカシ也直垂ヒカシはヒカシ名ヒカシ付ヒカシるヒカシをヒカシ略ヒカシしヒカシてヒカシひヒカシとヒカシのヒカシいヒカシひヒカシぢヒカシりヒカシたヒカシゆヒカシ人ヒカシ晝ヒカシ着ヒカシるヒカシ直垂ヒカシとヒカシありヒカシ名ヒカシはヒカシ成ヒカシるヒカシ夜具ヒカシの直垂ヒカシの事古ヒカシ也ヒカシありヒカシんヒカシんヒカシんヒカシんヒカシ太ヒカシのヒカシ事

をこらう心はて古く<sup>一</sup><sup>二</sup><sup>三</sup><sup>四</sup><sup>五</sup><sup>六</sup><sup>七</sup><sup>八</sup><sup>九</sup><sup>十</sup><sup>十一</sup><sup>十二</sup><sup>十三</sup><sup>十四</sup><sup>十五</sup><sup>十六</sup><sup>十七</sup><sup>十八</sup><sup>十九</sup><sup>二十</sup><sup>二十一</sup><sup>二十二</sup><sup>二十三</sup><sup>二十四</sup><sup>二十五</sup><sup>二十六</sup><sup>二十七</sup><sup>二十八</sup><sup>二十九</sup><sup>三十</sup><sup>三十一</sup><sup>三十二</sup><sup>三十三</sup><sup>三十四</sup><sup>三十五</sup><sup>三十六</sup><sup>三十七</sup><sup>三十八</sup><sup>三十九</sup><sup>四十</sup><sup>四十一</sup><sup>四十二</sup><sup>四十三</sup><sup>四十四</sup><sup>四十五</sup><sup>四十六</sup><sup>四十七</sup><sup>四十八</sup><sup>四十九</sup><sup>五十</sup><sup>五十一</sup><sup>五十二</sup><sup>五十三</sup><sup>五十四</sup><sup>五十五</sup><sup>五十六</sup><sup>五十七</sup><sup>五十八</sup><sup>五十九</sup><sup>六十</sup><sup>六十一</sup><sup>六十二</sup><sup>六十三</sup><sup>六十四</sup><sup>六十五</sup><sup>六十六</sup><sup>六十七</sup><sup>六十八</sup><sup>六十九</sup><sup>七十</sup><sup>七十一</sup><sup>七十二</sup><sup>七十三</sup><sup>七十四</sup><sup>七十五</sup><sup>七十六</sup><sup>七十七</sup><sup>七十八</sup><sup>七十九</sup><sup>八十</sup><sup>八十一</sup><sup>八十二</sup><sup>八十三</sup><sup>八十四</sup><sup>八十五</sup><sup>八十六</sup><sup>八十七</sup><sup>八十八</sup><sup>八十九</sup><sup>九十</sup><sup>九十一</sup><sup>九十二</sup><sup>九十三</sup><sup>九十四</sup><sup>九十五</sup><sup>九十六</sup><sup>九十七</sup><sup>九十八</sup><sup>九十九</sup><sup>百</sup>

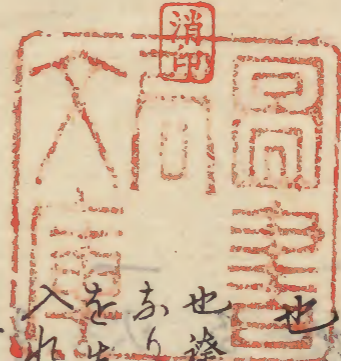
をこらう心はて古く<sup>一</sup><sup>二</sup><sup>三</sup><sup>四</sup><sup>五</sup><sup>六</sup><sup>七</sup><sup>八</sup><sup>九</sup><sup>十</sup><sup>十一</sup><sup>十二</sup><sup>十三</sup><sup>十四</sup><sup>十五</sup><sup>十六</sup><sup>十七</sup><sup>十八</sup><sup>十九</sup><sup>二十</sup><sup>二十一</sup><sup>二十二</sup><sup>二十三</sup><sup>二十四</sup><sup>二十五</sup><sup>二十六</sup><sup>二十七</sup><sup>二十八</sup><sup>二十九</sup><sup>三十</sup><sup>三十一</sup><sup>三十二</sup><sup>三十三</sup><sup>三十四</sup><sup>三十五</sup><sup>三十六</sup><sup>三十七</sup><sup>三十八</sup><sup>三十九</sup><sup>四十</sup><sup>四十一</sup><sup>四十二</sup><sup>四十三</sup><sup>四十四</sup><sup>四十五</sup><sup>四十六</sup><sup>四十七</sup><sup>四十八</sup><sup>四十九</sup><sup>五十</sup>...

時代といふもの知悉す何の書にも見えず用ひぬべきものを知るべき筋をおや筋と細き筋を子筋といふ子持筋といふはあつて後世の作意ありて是れ後時代の日記婚礼式法の書に子持筋用るるなり

一 次子装束と云物古くあり火のりも古よりあるなりあれどもこれより今江戸ハ祇の外繁華花見人遊みあきお火事ハ一月の内は夜更あり依り火消の役人ありておのづから火を防ぐは装束出来たる之れも始ハ草紙中草羽織を羽取りしり羽織くは結構ありて今ハ羅紗にて火子装束を作ると今更のものも後ハ古よりあり物の始まる人の思ふにこれハ是を記しおく

其の四十九子ふてう  
其の平條の子トアルキヲ飛クニナラシメテ四十二ノ子ナドニテ  
今モ忘ラナラヒアリノ五月トモアモ五月廿日ニ生ル  
子ハ親ノ高アヒキト云フ俗習アルトニテ又テ唐去所  
ノ孟嘗君ノ事ニモオルトアリニト云フ

一 凡装束を忌むるは先袴を着るたの足を先より入る次は



右の足を先に入れて袴をはきしむ打込て着て袖を装束の上を  
着る也先虎手を返す次は右の手を通す袖袴の右腰をひ  
次より右腰をひかへて此着るる順也逆ハ忌む事  
也袴を先より着るは上を先よりハ逆あるやあれども逆は何  
も順天の地をおかぬかごとり上あり袖ハ下をおかぬ順  
也袴を先より着るは右の手を返す次は上を先よりハ上を  
あり又虎手より右の順也右より左へめぐるは逆故に虎手  
を先より返す右の手を返す返すは袴ハ足を先より入る  
入る右を返すは右の手を返すは右の手を返すは右の手を返す  
逆を忌むハ袖ハひきまりハ何れも右よりと逆を忌むハ右  
凶を忌むハ礼也昔礼凶礼混雜さるるは右装束着るは右

貞丈雜記卷之五

